

第 15 章

パандаヴァ兄弟、時を得て出家する

第 1 節

सूत उवाच

एवं कृष्णसखः कृष्णो भ्रात्रा राज्ञाविकल्पितः ।
नानाशङ्कास्पदं रूपं कृष्णविश्लेषकर्षितः ॥ १ ॥

sūta uvāca

*evam kṛṣṇa-sakhaḥ kṛṣṇo
bhrātrā rājñā vikalpitaḥ
nānā-śaṅkāspadam rūpaṁ
kṛṣṇa-viśleṣa-karṣitaḥ*

sūtaḥ uvāca—スータ・ゴースヴァーミーが言った; *evam*—そのように; *kṛṣṇa-sakhaḥ*—クリシュナの名高い友人; *kṛṣṇaḥ*—アルジュナ; *bhrātrā*—兄による; *rājñā*—ユディシュティラ王; *vikalpitaḥ*—想像して; *nānā*—さまざまな; *śaṅkā-āspadam*—多くの疑問にもとづいて; *rūpaṁ*—姿; *kṛṣṇa*—主シュリー・クリシュナ; *viśleṣa*—惜別の情; *karṣitaḥ*—希望をほとんど奪われて。

スータ・ゴースヴァーミーが言った。「主クリシュナの名高い友人アルジュナは深い悲しみに沈んでいた。クリシュナとの惜別の情と、そして想像をめぐらしていたマハーラージャ・ユディシュティラのさまざまな質問のために」

要旨解説

アルジュナはあまりの悲しみのため声は詰まり、想像をめぐらすマハーラージャ・ユディシュティラのさまざまな質問にまともに答えることさえできませんでした。

第 2 節

शोकेन शृष्यद्वदनहत्सरोजो हतप्रभः ।

विभुं तमेवानुस्मरन्नाशक्रोत्रतिभाषितुम् ॥ २ ॥

*śokena śuśyad-vadana-
hṛt-sarojo hata-prabhaḥ
vibhum tam evānusmaran
nāśaknot pratibhāṣitum*

śokena—惜別の思いのために; *śuśyat-vadana*—口が渴ききっている; *hṛt-sarojaḥ*—蓮華のような心; *hata*—失って; *prabhaḥ*—体の輝き; *vibhum*—至高者; *tam*—主クリシュナに; *eva*—確かに; *anusmaran*—心の中で考えている; *na*—できなかつた; *aśaknot*—～できる; *pratibhāṣitum*—正しく答えている。

アルジュナの口、そしてその蓮華のような心も深い悲しみのために渴ききっていた。そのために体の輝きを失っていたのである。至高主を思いうかべるいま、ひとことも兄の問いに答えることができなかつた。

第3節

कृच्छ्रेण संस्तभ्य शुचः पाणिनामृज्य नेत्रयोः ।
परोक्षेण समुन्नद्धप्रणयौत्कण्ठ्यकातरः ॥ ३ ॥

*kṛcchreṇa saṁstabhya śucaḥ
pāṇināmṛjya netrayoḥ
parokṣeṇa samunnaddha-
praṇayaoutkaṅṭhya-kātarah*

kṛcchreṇa—やっとの思いで; *saṁstabhya*—力で止めて; *śucaḥ*—惜別の; *pāṇinā*—彼の手で; *āmṛjya*—塗っている; *netrayoḥ*—目; *parokṣeṇa*—視界から消えたために; *samunnaddha*—ますます; *praṇaya-outkaṅṭhya*—強く愛着を感じている; *kātarah*—苦しんで。

目にあふれる悲しみの涙を、アルジュナはやっとの思いで抑えた。去っていった主クリシュナを思う悲しみに打たれ、なおも高まっていく主への愛着に浸るばかりであった。

第4節

सख्यं मैत्री सौहृदं च सारथ्यादिषु संस्मरन् ।
नृपमग्रजमित्याह बाष्पगद्गदया गिरा ॥ ४ ॥

sakhyam maitrīm sauḥṛdam ca
sārathyādiṣu saṁsmaran
nṛpam agrajam ity āha
bāṣpa-gadgadayā girā

sakhyam—幸福を願っている; maitrīm—恩恵; sauḥṛdam—親密にかかわっている; ca—もまた; sārathyā-ādiṣu—馬車の御者になることで; saṁsmaran—これらすべてを思いだしている; nṛpam—王に; agrajam—長男; iti—このように; āha—言った; bāṣpa—重苦しく呼吸している; gadgadayā—圧倒的に; girā—語りによって。

アルジュナは、主クリシュナのこと、主からさずかった祝福や恩恵、主との親密な家族同士のつながり、そして主が御者になったことなどを次々に思いだして悲しみに打ちひしがれ、あえぎつつ話しはじめた。

要旨解説

至高の生命体は、みずからの純粋な献愛者との関係をすべて完璧に満たします。シュリー・アルジュナは、友愛の絆のなかで主とふれあっていた純粋な献愛者の典型的な一人であり、主のアルジュナとの交わりは、最高かつ完璧な境地でなされました。主はアルジュナの幸せを望んだことはもちろんですが、真の恩人として、その結びつきをさらに強くするために、スバドゥラーとの結婚をとおしてアルジュナとの家族の絆を堅くしたのです。また主はとりわけ、親友であるアルジュナを戦闘の危険から救うためにアルジュナの戦闘馬車の御者になってくれたのであり、またパーンダヴァ兄弟を世界の統治者として就任させたことを心から嬉しいと思いました。アルジュナはこのような出来事を一つひとつ思いだし、その思いに圧倒されているのです。

第5節

अर्जुन उवाच
वद्वितोऽहं महाराज हरिणा बन्धुरूपिणा ।

येन मेऽपहतं तेजो देवविस्मानं महत् ॥ ५ ॥

arjuna uvāca
vañcito 'ham mahā-rāja
hariṇā bandhu-rūpiṇā
yena me 'pahṛtam tejo
deva-vismāpanam mahat

arjunaḥ uvāca—アルジュナが言った; vañcitaḥ—主に取り残されて; aham—私自身; mahā-rāja—王よ; hariṇā—人格主神によって; bandhu-rūpiṇā—あたかも親友のように; yena—～である者によって; me—私の; apahṛtam—私は～を奪われた; tejaḥ—力; deva—半神達; vismāpanam—驚くばかりの; mahat—驚くような。

アルジュナが言った。「王よ。私を、ほんとうの親友として扱ってくれた最高人格主神ハリが、私をひとり残して去ってしまわれた。そのため、半神たちでさえ脅かせた私の途方もない力はもう私の内にはない」

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』（第10章・第41節）で主が言います。「ある者が、財産、力、美しさ、知識、さらには物質的に求められるものすべてにおいて特に優れた力を発揮しているのは、わたしの完璧な全エネルギーの一部を表わしているにすぎない」。ですから、だれであろうと、主に力を授かっていなければ、どれほどの力でも独自にそなえることはできません。主が、永遠に解放されている交流者たちと地球に降誕するとき、みずから神聖な力を発揮するのですが、化身としての使命をはたすために必要な力を交流者である献愛者にも授けます。また『バガヴァッド・ギーター』（第4章・第5節）でも言われているように、主と主の永遠の交流者たちはなんども地上に降誕しますが、主は化身としてのさまざまな役目をすべて覚えているいっぽう、交流者のほうは、（主の至上の意志の力で）忘れてしまいます。同じように、地球から姿を消すとき、交流者たち全員も連れかえります。アルジュナに授けられた力やエネルギーは主の使命実現のために必要だったのですが、その使命がまっとうされれば、その時にこめられていた力はアルジュナから取りだされます。なぜなら、天界の住人たちでさえ仰天させたアルジュナの驚くべき力はもう要らなくなるからであり、またそれらは、ふるさとに、神のもとに帰るためにある力ではなかったからです。アルジュナや天界に住む半神たちでさえ、

主によって力が授けられたり取りさられたりするのですから、そのような偉大な魂と比べればちっぽけな存在でしかない凡人など言うまでもありません。ですから、私たちが学ぶべきことは、主から借りているだけの力を鼻にかけてはいけない、という教訓です。健全に判断できる人なら、その恩恵を授かったことをありがたく思い、その力を主への奉仕に使うべきです。またそのような力は、主によっていつでも抜き取られるのですから、授かった力や富を主への奉仕に利用するのが一番正しい使い方なのです。

第6節

यस्य क्षणवियोगेन लोको ह्यप्रियदर्शनः ।
उक्थेन रहितो ह्येष मृतकः प्रोच्यते यथा ॥ ६ ॥

*yasya kṣaṇa-viyogena
loko hy apriya-darśanaḥ
ukthena rahito hy eṣa
mṛtakaḥ procyate yathā*

yasya—～である者の; *kṣaṇa*—瞬間; *viyogena*—別れによって; *lokaḥ*—全宇宙; *hi*—確かに; *apriya-darśanaḥ*—すべては不利に見える; *ukthena*—命によって; *rahitaḥ*—～がなく; *hi*—確かに; *eṣaḥ*—これらすべての肉体; *mṛtakaḥ*—死体; *procyate*—指名されて; *yathā*—いわば。

主とほんの少しでも離れていれば、命を失った体のように、宇宙全体が不快でむなしい場所になってしまう——私はその主を見失ってしまったのだ。

要旨解説

じっさい、生命体にとって主ほど愛しい方はいません。主は、スヴァーンシャ (*svāmśa*)、ヴィビンナーンシャ (*vibhinnāmśa*) のように、無数の部分体としてみずからを拡張させます。パラマートマーは主のスヴァーンシャ部分体、そしてヴィビンナーンシャの部分体は生命体のことです。生命体がいなければ肉体にはなんの価値もないのですから、生命体は物質の体には重要な要素です。同じように、パラマートマーの存在がなければ、生命体にも今存在することもできません。さらに、ブラフマンあるいはパラマートマーにしても、至高主がいなければ存在そのものはありません。このことは『バガヴァッド・ギーター』で徹底的に説明されています。かれらは互いにつながれている、あるいは相互に依存している存在です。このように、最

終的に主は至高善ですから、すべての生命原理です。

第7節

यत्संश्रयाद् द्रुपदगेहमुपागतानां
राज्ञां स्वयंवरमुखे स्मरदुर्मदानाम् ।
तेजो हतं खलु मयाभिहतश्च मत्स्यः
सञ्जीकृतेन धनुषाधिगता च कृष्णा ॥ ७ ॥

*yat-saṁśrayād drupada-geham upāgatānām
rājñām svayaṁvara-mukhe smara-durmadānām
tejo hṛtam khalu mayābhīhataś ca matsyaḥ
sajjīkṛtena dhanuṣādhiगतā ca kṛṣṇā*

yat—～の慈悲によって; saṁśrayāt—力によって; drupada-geham—ドウルパダ王の宮殿で; upāgatānām—集まった者達全員; rājñām—王子達の; svayaṁvara-mukhe—花婿選びの行事で; smara-durmadānām—欲情に駆られた者達; tejaḥ—力; hṛtam—征服した; khalu—いわば; mayā—私によって; abhīhataḥ—突き通した; ca—もまた; matsyaḥ—魚の的; sajji-kṛtena—矢を構えて; dhanuṣā—その弓によっても; adhiगतā—手に入れた; ca—もまた; kṛṣṇā—ドウラウバディー。

主の慈悲深い力があったからこそ、私はドウルパダ王の宮殿で行なわれた花婿選びで、欲情に満ちた王子たちをしりぞけることができました。私は弓と矢を使って魚の的を貫き、そしてドウラウバディーと結婚することができたのです。

要旨解説

ドウラウバディーは、ドウルパダ王のもっとも美しい娘で、どの王子たちもうら若い彼女と結婚したいと思っていました。しかしドウルパダ・マハーラージャは、娘を嫁がせるのはアルジュナだけと決めており、そのために独自の方法を用意していました。まず、天上から魚をつるし、その真下に輪を置いてその魚をさえぎります。勝利するには、王子の地位にある挑戦者が、その魚を見えにくくしている輪のあいだに矢を放ち、魚の目を射抜かなくてはなりません。しかもその的を直接見てはいけない、という条件が設定されています。床に水瓶が置いてあり、揺れるその水面に反射している天井の的に（直接的を見つめずに）狙いを定め、そして矢を射なくてはならないのです。マハーラージャ・ドウルパダは、アルジュナだけが、あるい

はありえるとすればカルナだけがこの計画をやったのけることをよく知っていました。しかしやはり娘を嫁がせる相手はアルジュナだけだと考えています。王子たちが集まったその会場で、ドウラウバディーの兄のドウリシュタデムナが集まった王子たちに成人になった娘を紹介したとき、カルナも会場にいました。しかしドウラウバディーはカルナがアルジュナのライバルにならないよう、言葉たくみに兄のドウリシュタデムナに、クシャトリヤよりも低い身分の男はぜったいに受けいれたくないという望みを伝えました。ヴァイシャとシュードラはクシャトリヤよりも身分が低いとされています。カルナはシュードラである大工の息子として知られていました。そのためドウラウバディーはこれを口実にしてカルナを拒否したのです。そして、貧しいブラーフマナに変装していたアルジュナが、至難の業とも思われるその的を射たとき、だれもが仰天し、全員が、とりわけカルナが、アルジュナと戦うことを希望しました。しかし、それまでそうだったように、主クリシュナの慈悲のおかげで、彼は王子たちの戦いでしりぞけ、こうしてクリシュナー、すなわちドウラウバディーという高貴な女性と結婚することができました。アルジュナは、主の力ゆえに時分はずばらしい力をさずかったことをよく知っていましたし、いなくなってしまった主を悲痛な気持ちで思いだしているのです。

第8節

यत्सन्निधावहमु खाण्डवमग्नयेऽदा-
मिन्द्रं च सामरगणं तरसा विजित्य ।
लब्धा सभा मयकृताद्भुतशिल्पमाया
दिग्भ्योऽहरन्पतयो बलिमध्वरे ते ॥ ८ ॥

*yat-sannidhāv aham u khāṇḍavam agnaye 'dām
indram ca sāmara-gaṇam tarasā vijitya
labdhā sabhā maya-kṛtādbhuta-śilpa-māyā
digbhyo 'haran nṛpatayo balim adhware te*

yat—～である者の; *sannidhau*—近くにいてること; *aham*—私自身; *u*—驚きの気配; *khāṇḍavam*—天界の王、インドラの保護された森; *agnaye*—火の神に; *adām*—救った; *indram*—インドラ; *ca*—もまた; *sa*—～と共に; *amara-gaṇam*—半神達; *tarasā*—あらゆる機才で; *vijitya*—征服して; *labdhā*—達成して; *sabhā*—集会堂; *maya-kṛtā*—マヤによって建てられた; *dbhuta*—非常に素晴らしい; *śilpa*—技術と手腕; *māyā*—能力; *digbhyaḥ*—あらゆる方角から; *aharan*—集めた; *nṛpatayaḥ*—すべての王子達; *balim*—貢ぎ物; *adhware*—持ち寄った; *te*—あなたの。

主が私のそばにいてくださったからこそ、優れた機才を使って、天界の力ある王であるインドラデーヴァやその仲間には勝つことができ、そのことで火の神がカーンダヴァの森を焼きつくことができました。そして主の恩寵があったからこそ、マヤという名の悪魔は燃えさかるカーンダヴァの森から救われ、おかげで私たちはすばらしい建築技術を駆使した集会堂を絶えることができ、そこで執行されていたラージャスーヤ・ヤギヤに集まった王子たちは、あなたに貢ぎ物を捧げることができたのです。

要旨解説

マヤ・ダーナヴァという悪魔はカーンダヴァの森の住人で、その森に火がつけられたとき、かれはアルジュナに救いを求めました。アルジュナはマヤ・ダーナヴァを救い、その結果、この悪魔はアルジュナに恩義を感じました。そして、パーンダヴァ兄弟のためにすばらしい集会堂を作り、国中の王子たちはその建物に驚嘆し、魅せられました。かれらはパーンダヴァ兄弟の超人的な力を感じ、こうして、恨むこともなく皇帝に貢ぎ物を差し出したのです。悪魔たちはすばらしい、そして超人的な力を持ち、その力で物質的な驚異を作り出すことができます。現代の悪魔といえば危害を加える科学者で、かれらは社会の混乱させるためになにか物質的な驚異を作りだします。マヤもそのような物質主義者で、そのような驚異的な物事を作り出す技術を知っていました。それでも、主クリシュナはこの悪魔を殺したいと考えます。火と主クリシュナの輪宝（チャクラ）に追われたとき、アルジュナという献愛者に救いを求め、アルジュナは主シュリー・クリシュナの火という怒りから救いました。ですから、献愛者は主よりも慈悲深いのであり、献愛奉仕においては、献愛者の慈悲は主の慈悲よりも価値があります。火と主はどちらも、悪魔がアルジュナという献愛者に庇護を求めた様子を見たとき、それ以上追いかけることをやめました。この悪魔はアルジュナに恩義を感じ、感謝の気持ちをしめすためになにかをしたいと申し出ましたが、アルジュナはなにかを交換にもらうことを断りました。しかし主シュリー・クリシュナはマヤが献愛者に救いを求めたことを嬉しく思い、すばらしい集会堂を作ってユディシュティラ王に奉仕をするよう助言しました。主の慈悲によって、主の献愛者に仕える機会が授かり、献愛者の恩寵によって主の慈悲が得られるのが、私たちが理解すべき点です。ビーマセーナの戦闘棒もマヤ・ダーナヴァからの贈り物です。

第9節

यत्तेजसा नृपशिरोऽङ्घ्रिमहन्मखार्थम्

आर्योऽनुजस्तव गजायुतसत्त्ववीर्यः ।
तेनाहताः प्रमथनाथमखाय भूपा
यन्मोचितास्तदनयन् बलिमध्वरे ते ॥ ९ ॥

yat-tejasā nṛpa-śiro-'nghrim ahan makhārtham
āryo 'nujas tava gajāyuta-sattva-vīryaḥ
tenāhṛtāḥ pramatha-nātha-makhāya bhūpā
yan-mocitās tad-anayan balim adhvare te

yat—～である者の; tejasā—影響力によって; nṛpa-śiraḥ-aṅghrim—その者の足は王の筆頭者達によって敬われていた; ahan—殺した; makha-artham—儀式のために; āryaḥ—尊い; anujaḥ—弟; tava—あなたの; gaja-ayuta—1万頭の象; sattva-vīryaḥ—強力な存在; tena—彼によって; āhṛtāḥ—集められた; pramatha-nātha—幽霊達の主人 (マハーバイラヴァ); makhāya—儀式のために; bhūpāḥ—王達; yat-mocitāḥ—その者によって彼らは自由の身となった; tat-anayan—彼ら全員が持ち寄った; balim—税金; adhvare—差し出した; te—あなたの。

1万頭の象に匹敵する力を持つあなたの尊い弟は、主の恩寵をさずかって、ジャラーサンダという多くの王に崇拜されていた王を殺しました。かれらはジャラーサンダのマハーバイラヴァ・ヤギヤのために集められたのですが、こうして救われました。そしてあなたに貢ぎ物を捧げたのです。

要旨解説

ジャラーサンダはマガダ国に住んでいる並外れた力を持つ王で、その生い立ちと活動もひじょうに興味深いものです。父ブリハドウラタ王もマガダ国で栄華をきわめ、権力を誇った王ですが、カーシー国の二人の娘と結婚しても息子に恵まれませんでした。どちらの女王からも子が授からないことに落胆した王は、苦行をするために妻たちとともに宮殿を出て森に住みました。そしてある偉大なりシから息子を授かる祝福を受け、女王たちに1個のマンゴーを与えました。二人はそれを食べ、やがて懐妊します。王は、子を宿した女王たちを見てとても喜びましたが、二人の女王はそれぞれ、一人の子を半分別々の体として出産しました。そしてどちらの体も森のなかに捨てられましたが、たまたまそこに住んでいた巨大な女の悪魔が、生まれたばかりの赤ん坊の肉と血が味わえることに狂喜します。しかし魔女は、その二つの体をくっつけたらどうなるか興味を持ち、二つの体を合わせると、一つの完全な体になって命もふきこまれました。

この魔女の名はジャラーといいますが、息子のいない王を哀れみ、王のところに行ってこのすばらしい赤ん坊を差しだしました。王は魔女の申し出にたいそう喜び、望むものを与える約束します。魔女が望んだのは、その子に自分の名前にちなんだ名前がつけられることでした。こうしてこの子の名前はジャラーサンダ、すなわち魔女のジャラーによってつなげられた者、という名前になりました。じつは、このジャラーサンダはヴィプラチッティという悪魔の部分体として誕生しています。聖者から女王たちに恩恵がさずけられ子どもが生まれましたが、その聖者の名をチャンドラ・カウシカといい、父親ブリハドウラタ王のまえで、その子の未来を予言しています。

その子ジャラーサンダは生まれたときから邪悪な気質をそなえていたため、やがて主シヴァという幽霊や悪魔たちの主人の偉大な信奉者になりました。ラーヴァナが主シヴァの熱心な信奉者だったように、ジャラーサンダ王も同じです。かれは自分の軍力で多くの小国の王を捕虜にし、かれらをマハーバイラヴァ（シヴァ）のまえでいけにえとして殺していたのです。以前はマガダと呼ばれていたビハール州には、主マハーバイラヴァあるいはカーラバイラヴァの献身者が大勢います。ジャラーサンダはクリシュナの母方の伯父カムサの親族だったため、カムサが死んだあとクリシュナの強力な宿敵となり、二人のあいだで幾度となく争いが繰りかえされました。主クリシュナはジャラーサンダを殺したいと思うのですが、かれに加勢する軍人まで殺すつもりはありませんでした。そこで、ジャラーサンダだけを殺す計画がたてられます。クリシュナとビーマとアルジュナは貧しいブラーフマナのかっこうをし、ジャラーサンダ王を訪ねて慈悲を乞いました。ジャラーサンダはどのようなブラーフマナに慈悲を乞われても決して断わらない男でしたが、だからといって献愛奉仕をするわけでもありませんでした。主クリシュナ、ビーマ、そしてアルジュナはジャラーサンダに戦うよう申しで、ジャラーサンダはビーマとだけ戦うことになりました。三人とも客人として、そして戦う相手として迎えられたのであり、こうしてビーマとジャラーサンダは数日にわたって戦いを交えます。ビーマは決着がなかなかつかないことに落胆するのですが、クリシュナはビーマに、ジャラーサンダは2つの体をつなぎあわせられた体を持っていることをヒントとして教え、それを知ったビーマはジャラーサンダの体を引き裂き、殺しました。こうして、マハーバイラヴァのまえで殺されるために収容されていた王たちは全員、ビーマによって救われました。かれらはパーンダヴァ兄弟に恩義を感じ、ユディシュティラ王に貢ぎ物を差しだしたのでした。

第10節

पत्न्यास्तवाधिमखकूमहाभिषेक-

श्लाघिष्ठचारुकबरं कितवैः सभायाम् ।
स्मृष्टं विकीर्य पदयोः पतिताश्रुमुख्या
यस्तत्त्रियोऽकृतहतेशविमुक्तकेशाः ॥ १० ॥

*patnyās tavādhimakha-klpta-mahābhiṣeka-
slāghīṣṭha-cāru-kabaram kitavaiḥ sabhāyām
sprṣtam vikīrya padayoḥ patitāśru-mukhyā
yas tat-striyo 'kṛta-hateśa-vimukta-keśāḥ*

patnyāḥ—その妻の; *tava*—あなたの; *adhimakha*—盛大な儀式の間に; *klpta*—着て; *mahā-abhiṣeka*—非常に神聖化され; *slāghīṣṭha*—そうして讃えられ; *cāru*—美しい; *kabaram*—束になった髪; *kitavaiḥ*—邪悪な者達によって; *sabhāyām*—盛大な集まりの中で; *sprṣtam*—捕まっ
て; *vikīrya*—ほどかれて; *padayoḥ*—足に; *patita-aśru-mukhyāḥ*—目に涙を浮かべてひれ伏した者
の; *yaḥ*—主; *tat*—彼らの; *striyaḥ*—妻達; *akṛta*—～になった; *hata-iśa*—夫を失って;
vimukta-keśāḥ—ほどかれた髪。

ラージャスーヤの供儀祭のために美しく飾られ、そして神聖化されていたあなたの女王の髪を、あろうことか、ほどこうとした無法者たちの妻全員の髪をほどいたのは主にほかなりません。そのとき、彼女は目に涙を浮かべて、主クリシュナの御足にひれ伏しました。

要旨解説

ドゥラウバディーは美しい髪を持ち、それはラージャスーヤ・ヤギヤの儀式をとおして神聖化されました。しかし賭けの代償となったため、ドゥフシャーサナはその神聖な髪に触れて彼女を冒瀆しました。ドゥラウバディーは主クリシュナの蓮華の御足に伏して救いを求め、主はその祈りに応え、クルクシェートラの戦いの結果として、ドゥフシャーサナの妻全員、そしてその仲間たちも髪をほどいて垂らすようになる、と心に決めました。こうして、クルクシェートラの戦いが終わったあと、ドゥリタラーシュトラの息子や孫たち全員が戦死したあと、その家族の妻たちは未亡人のように髪を垂らすようになってしまったのです。言いかえれば、クル家の妻たちは、ドゥフシャーサナが主の偉大な献愛者を冒瀆したために未亡人になったということです。主は、父が我が子の無礼に耐えるように、どれほど邪悪な人間に冒瀆されても耐えます。しかし、自分の献愛者が冒瀆されることには耐えられません。偉大な魂を冒瀆する者は、善行の結果も恩恵もすべて失ってしまうのです。

第 1 1 節

यो नो जुगोप वन एत्य दुरन्तकृच्छ्रद्
दुर्वाससोऽरिचित्तादयुताग्रभुग् यः ।
शाकान्नशिष्टमुपयुज्य यत्त्रिलोकीं
तृप्तममंस्त सलिले विनिमग्नसङ्घः ॥ ११ ॥

*yo no jugopa vana etya duranta-kṛcchrād
durvāsaso 'ri-racitād ayutāgra-bhug yaḥ
śākānna-śiṣṭam upayujya yatas tri-lokīm
tṛptām amamsta salile vinimagna-saṅghaḥ*

yaḥ—～である者; naḥ—私達に; jugopa—保護する; vane—森; etya—～に入っている;
duranta—危険に; kṛcchrāt—困難; durvāsasaḥ—ドウルヴァーサー・ムニの; ari—敵; racitāt—～によ
って作りあげられる; ayuta—1万; agra-bhuk—～の前で食べる者; yaḥ—その人物;
śāka-anna-śiṣṭam—食料の残り物; upayujya—受けいれて; yataḥ—なぜなら; tri-lokīm—三界全体;
tṛptām—満足して; amamsta—心の中の思い; salile—水の中にいる間; vinimagna-saṅghaḥ—全員
が水の中に入った。

私たちが追放生活をしていたころ、1万人の弟子たちと食事をするのを常としていたドウル
ヴァーサー・ムニは、私達を危険な状態におとしいれようと、敵と結託して奸策をめぐらしま
した。そのとき主（クリシュナ）は、食べ物の残りを食べただけで、私達を救ってくださ
った。主がそれを食べたからこそ、川で沐浴していた大勢のムニは満腹になったのです。そして、
この三界すべても満たされました。

要旨解説

ドウルヴァーサー・ムニ 堅い決意と厳格な苦行をとおして宗教原則に従うことを誓ったひじ
ょうに力強い神秘的なブラーフマナ。その名前は、多くの歴史的出来事と関連づけられており、
この偉大な神秘家は、主シヴァのように、すぐに満足したり激昂したりすることで知られてい
ます。満足すれば、仕えた相手に途方もなくすばらしい返礼をするのですが、不満でも感じよ
うものなら、最悪の惨劇を引き起こすことができました。クマーリー・クンティは、父の家
を訪ねてくる偉大なブラーフマナたちにさまざまな奉仕をしていたのですが、あるときドウル

ヴァーサ・ムニを巧みに接待したことで、会いたい半神だれにでも会える能力を授かりました。じつはドウルヴァーサ・ムニは主シヴァの完全化身であり、たやすく満足したり激高したりしたのです。彼は主シヴァの偉大な信奉者でもあり、シュヴェータケートウ王が100年に及ぶ儀式を執行するとき、主シヴァの命令で王の僧侶になることに同意しました。ときには、インドラデーヴァの天界の国にある議会の集会場を訪ねることがありました。すばらしい神通力を使って空間を移動することができ、物質界を超えたヴァイクンタまでの相当の距離を旅したこともあります。これは、偉大な献愛者で世界の皇帝だったアンバリーシャ王に言いがかりをつけて争い、1年にわたってヴァイクンタまでの長い距離を飛びつづけたときのことです。

どこへ行くにもおよそ1万人の弟子を従え、偉大なクシャトリヤ王の客人になっても、その従者たちを連れていきました。あるとき、マハーラージャ・ユディシュティラの敵でいともあるドゥリヨーダナの家を訪ねたことがあります。ドゥリヨーダナは悪知恵の働く男だったので、いたれりつくせりのもてなしでこのブラーフマナ・リシを満足させ、その結果、リシから恩恵を授けることになりました。ドゥリヨーダナはその神通力をよく知っており、この神秘家が不機嫌になればとんでもない混乱をもたらすこともわかっていたので、その怒りの矛先を自分の敵であるパーンダヴァ兄弟に向けさせるよう企てました。リシが恩恵を授けるつもりになったとき、ドゥリヨーダナは、「私のいとこのなかでは最年長で、もっとも主要な人物であるマハーラージャ・ユディシュティラをご訪問ください」と頼みます。しかし内心、ユディシュティラ王が妻のドゥラウパディーと食事をすませたあとに行ってもらおうつもりでした。ドゥリヨーダナはよく知っていたのです——ドゥラウパディーと食事をしたあとに大勢のブラーフマナの客人をもてなせるはずがないし、失礼があればリシは怒り、ユディシュティラ王に対して一悶着を起こすだろう——と。それがドゥリヨーダナの魂胆でした。ドウルヴァーサ・ムニはその申し出を受けいれ、ドゥリヨーダナの策略どおりに、王とドゥラウパディーが食べ終わったあとに、追放生活をしている王のもとに向かいました。

ユディシュティラ王の家に到着したドウルヴァーサ・ムニはすぐに丁重に迎えられ、王は、川で午後の宗教儀式をすませるようブラーフマナに頼みます。そうすれば、川から戻ってくるころには食事の準備がととのっているからです。ドウルヴァーサ・ムニは、1万人の弟子をつれて川へ沐浴に行きますが、マハーラージャ・ユディシュティラは気が気ではありませんでした。ドゥラウパディーが食事をしていなければ、どれほどの客人でももてなせるのですが、リシは、ドゥリヨーダナの計略で、ドゥラウパディーが食事をすませたあとに到着してしまっていたのです。

献愛者は苦境におちいると、主のことを一心に思う機会を得ます。ですから、そのような危

うい状況になれば主クリシュナのことしか考えませんし、どこにでもいる主はすぐに献愛者の危機をすぐに察知します。主は瞬時にユディシュティラの家に現われ、食べ残しの料理はないか、あったら出すように、とドウラウパディーに言いました。ドウラウパディーは言葉を失いました。なにも残っていなかったからです。そして主に、太陽神から授かった神秘的な皿は、私が食べていなければいくらかでも食べ物を作り出せるのです、と言いました。しかし、その日はすでに食事をすませており、そのために困っているのです。彼女はこの苦境を主に説明しながら、主のまえで泣くしかありませんでした。女性はこのような状態にさらされると、泣く以外になにもできないのです。しかし主は、料理の鍋を持ってくるように言い、そのなかに少しでも残っていないか尋ねました。ドウラウパディーがよく見るとわずかに野菜がくっついています。主はすぐにそれをつまみ、食べました。そのあと主はドウラウパディーに、ドウルヴァーサと弟子たちを呼ぶよう言いました。

彼らを川から呼ぶためにビーマが遣わされました。ビーマがリシたちに言います、「どうして、いらっしゃらないのですか。食事は準備万端ととのっておりますので、おいでください」。しかしブラーフマナたちは、主クリシュナがああ少しの野菜を食べていたことから、川のなかにいたというのに、もう腹一杯になっていたのです。マハーラージャ・ユディシュティラが自分たちのためにごちそうをたくさん作って待っていると思っっているのですが、もう空腹ではないし、一口も食べられないだろうから王はさぞかし残念に思うだろう、だから行かないほうがいい——そう考えた彼らは、結局、行くことをやめました。

この出来事は、主こそがもっとも偉大な神秘家であることを物語っており、そのため主はヨーゲーシュヴァラという別名で知られています。この話から学べるもう一つの教えは、世帯者なら主に必ず食べ物をささげなくてはならない、そうすればたとえ1万人もの客人が訪ねてきても彼らを満足させられるし、主が満足するから彼らも満足する、という事実です。それが献愛奉仕の方法なのです。

第12節

यत्तेजसाथ भगवान् युधि शूलपाणि-
विस्मापितः सगिरिजोऽस्त्रमदात्रिजं मे ।
अन्येऽपि चाहममुनैव कलेवरेण
प्राप्तो महेन्द्रभवने महदासनार्थम् ॥ १२ ॥

yat-tejasātha bhagavān yudhi śūla-pāṇir

*vismāpitaḥ sagirijo 'stram adān nijam me
anye 'pi cāham amunaiva kalevareṇa
prāpto mahendra-bhavane mahad-āsanārdham*

yat—～である者によって; tejasā—影響力によって; atha—かつて; bhagavān—神々の一人（主シヴァ）; yudhi—戦いにおいて; śūla-pāṇiḥ—手に三つ叉を持つ者; vismāpitaḥ—驚いて; sa-girijaḥ—ヒマラヤ山脈の娘と共に; astram—武器; adāt—与えられて; nijam—彼自身の; me—私に; anye api—また他の者達も; ca—そして; aham—私自身; amunā—これによって; eva—確かに; kalevareṇa—体によって; prāptaḥ—到達して; mahā-indra-bhavane—インドラデーヴァの家で; mahat—偉大な; āsana-ardham—半分高い座。

私が、主シヴァという人物を、そしてヒマラヤ山の娘であるその妻を驚かせることができたのは、ひとえに、主の影響力があったからにほかなりません。そして主シヴァは私に好意をしめし、ご自分の武器を私に授けました。さらにほかの半神たちが自分たちの武器を私に与え、また私はこの体を使って天界の惑星に行き、そして2番目に高い座にすわることを許されました。

要旨解説

最高人格主神シュリー・クリシュナの恩寵によって、主シヴァを含む半神たちすべてが、アルジュナのふるまいに満足しました。これは、たとえ主シヴァやそのほかの半神たちに好意をしめされたとしても、至高主シュリー・クリシュナから好意を授かったことにはならない、ということを表わしています。ラーヴァナが主シヴァの優れた信奉者であったことに疑いはありませんが、最高人格主神・主ラーマチャンドラの怒りからは救われませんでした。このような歴史的事実はプラーナに数多く記述されています。しかしここでは、主シヴァがアルジュナと戦うことさえまきこまれ、そしてアルジュナの戦いぶりを喜んだことがわかります。至高主の献愛者は、半神をどのように尊んだらいいのかをよく知っていますが、半神の信奉者たちは、愚かなことに、最高人格主神は半神に匹敵するわけではない、と考えたりします。そのような考えを持つ者は冒涇者になり、やがては、ラーヴァナや他の悪魔たちと同じ末路をたどるのです。アルジュナが主シュリー・クリシュナと親しく交わっていたときに関して挙げた例は、至高主シュリー・クリシュナをただ喜ばせることができればあらゆる恩寵を授かるという教えを確信している人々にとってはすばらしい啓蒙になりますが、いっぽう半神の信奉者や崇拜者は、半神がやがて滅びるように、彼らから部分的な恩恵だけを得ても、それは最後にはなくなって

しまうものです。

この節に含まれているもう一つの重要性は、アルジュナが、主シュリー・クリシュナの恩寵によって、自分の体で天界の惑星に行くことができ、そして半分高くなった座席に座って天界の王インドラデーヴァに讃えられた、という点にあります。シャーストラで勧められている果報的活動にもとづいて善行をする人は、天界の惑星に行くことができます。そして『バガヴァッド・ギーター』（第9章・第21節）で言われているように、その善行の反動がすべて消費されてしまえば、ふたたび地球に降りてこなくてはなりません。月は天界の惑星と同じレベルにあり、生きているあいだに善行を積んだ人だけが、つまり儀式をしたり、慈善をほどこしたり、厳しい苦行をしたりした人たちが、体が終わったあとにその惑星に入ることが許されます。アルジュナは、主の恩寵で、自分の体で天界の惑星に入ることが許されましたが、それはふつうの人間には起こりえません。天国の惑星に入ろうとする現代科学者たちの試みが失敗することは目に見えています。彼らはアルジュナと同じレベルにいるわけではないからです。ごくふつうの人間でしかなく、儀式、慈善、苦行という資質をそなえていません。物質の体は、徳・激情・無知という物質自然界の三様式の影響を受けています。現代人は、程度の差こそあれ激情と無知の様式に影響されており、その影響の兆候は、人々が欲情と貪欲に満ちている状態に如実に現われています。墮落してしまったそのような人々は、高位の天体系に近づくことはほとんどできません。天界の惑星の上には別の惑星も無数に浮かんでおり、またそこには徳の様式の影響を受けた人だけしか入ることができません。宇宙内の天国や別の惑星では、その住人たちは人間よりもはるかに高い知性をそなえ、そして最高の徳の様式に住む敬虔な生命体ばかりが暮らしています。彼らは全員が主の献愛者であり、またその徳性に不純なものは混ざってはいませんが、物質界で得られる最高の優れた質をそなえた半神として知られています。

第13節

तत्रैव मे विहरतो भुजदण्डयुग्मं
गाण्डीवलक्षणमरातिवधाय देवाः ।
सेन्द्राः श्रिता यदनुभावितमाजमीढ
तेनाहमद्य मुषितः पुरुषेण भूम्ना ॥ १३ ॥

*tatraiva me viharato bhujā-daṇḍa-yugmaṁ
gāṇḍīva-lakṣaṇam arāti-vadhāya devāḥ
sendrāḥ śritā yad-anubhāvitam ājamīḍha*

tenāham adya muṣitaḥ puruṣeṇa bhūmnā

tatra—天界の惑星において; eva—確かに; me—私自身; viharataḥ—客人として滞在していた間; bhuja-daṇḍa-yugmam—私の両方の腕; gāṇḍīva—ガンディーヴァという名の私の弓; lakṣaṇam—印; arāti—ニヴァータカヴァチャという名前の悪魔; vadhāya—殺すために; devāḥ—すべての半神達; sa—～と共に; indrāḥ—天界の王、インドラ; śritāḥ—～に庇護を求める; yat—～である者によって; anubhāvitam—力強くすることができた; ājamīdha—アジャミーダ王の子孫よ; tena—主によって; aham—私自身; adya—現在; muṣitaḥ—～を失って; puruṣeṇa—その人物; bhūmnā—至上の。

私が数日間、天界の惑星に客人としてとどまったとき、インドラデーヴァを含む半神たち全員が、ニヴァータカヴァチャという名の悪魔を殺すため、ガンディーヴァの弓を持つ私の腕に庇護を求めました。王よ、アジャミーダの子孫よ、いま私は最高人格主神を失ってしまいました。私に剛力を授けてくださったその方を。

要旨解説

天界の半神たちは、確かに私たちよりも知性があり力をそなえています。主シュリー・クリシュナの恩寵によって力が注がれたガンディーヴァの弓を持つアルジュナに救いを求めなくてはなりません。主はあらゆる力をそなえた方であり、主の慈悲を授かった純粋な献愛者は、主の望みどおりに力を授かり、またその力に限界はありません。そして主が、だれからであろうと、その力を取りさってしまうと、その力は消え失せてしまうのです。

第 1 4 節

यद्बान्धवः कुरुबलाब्धिमनन्तपार-
मेको रथेन ततरेऽहमतीर्यसत्त्वम् ।
प्रत्याहतं बहु धनं च मया परेषां
तेजास्पदं मणिमयं च हतं शिरोभ्यः ॥ १४ ॥

yad-bāndhavaḥ kuru-balābhdhim ananta-pāram
eko rathena tatara 'ham atīrya-sattvam
pratyāhṛtaṁ bahu dhanam ca mayā pareṣām

tejāspadam maṇimayam ca hṛtam śirobhyaḥ

yat-bāndhavaḥ—その方の友好関係だけによって; kuru-bala-abdhim—クル家の軍力という大海; ananta-pāram—乗りこえることのできないもの; ekaḥ—一人; rathena—馬車に座って; tatara—渡りきることができた; aham—私自身; atīrya—無敵の; sattvam—存在; pratyāhṛtam—取り戻した; bahu—非常に大量の; dhanam—財産; ca—もまた; mayā—私の～によって; pareṣām—敵の; teja-āspadam—光の源; maṇi-mayam—宝石で飾られた; ca—もまた; hṛtam—力づくで奪われて; śirobhyaḥ—彼らの頭から。

カウラヴァ兄弟たちの軍力は広大な海と呼ぶにふさわしく、その海には無敵の戦士が住み、だれもかれらを打ち負かすことはできません。それでも私は、主と友としての絆があったからこそ、戦闘馬車に座ってその大海を制覇することができました。そして主の慈悲があったからこそ、私は牛を取りもどし、まばゆい光を四方に放っていた宝石で飾られていた王たちの王冠を大量に集めることができたのです。

要旨解説

カウラヴァ兄弟側には、ビーシュマ、ドローナ、クリパ、カルナなど、屈強の将軍が勢揃いしていましたし、かれらの力量は広大な海に匹敵し、だれも立ち向かうことはできませんでした。それでも、主クリシュナの恩寵があったからこそ、アルジュナはたったひとりで、馬車に座り、苦もなくかれらを片っ端から葬りさることができました。敵軍では入れ替わり立ち替わり将軍が変わっていたのですが、パーンダヴァ兄弟側では、アルジュナだけが主クリシュナに操られた戦闘馬車に乗って、かの大戦の全責任を一手にひきうけていたのです。同じように、パーンダヴァ兄弟が身を明かすことなくヴィラータの地に住んでいたころ、カウラヴァ兄弟はヴィラータ王に争いをしかけ、王の大量の牛を強奪しようとしていました。かれらが牛を連れさろうとしていたとき、アルジュナは名をふせてかれらと戦い、牛を取りもどし、さらには国王のターバンを飾る宝石を戦利品として力づくで手に入れました。アルジュナはそのことを思いだしています、主の恩寵があったからこそできたことなのだ、と。

第 1 5 節

यो भीष्मकर्णगुरुशत्यचमूष्वदभ्र-
राजन्यवर्यरथमण्डलमण्डितासु ।

अग्रेचरो मम विभो रथयूथपाना-
मायुर्मनांसि च दृशा सह ओज आर्च्छत् ॥ १५ ॥

yo bhīṣma-karṇa-guru-śalya-camūṣv adabhra-
rājanya-varya-ratha-maṇḍala-maṇḍitāsu
agrecaro mama vibho ratha-yūthapānām
āyur manāmsi ca dṛśā saha oja ārcchat

yaḥ—それは主だけである; bhīṣma—ビーシュマ; karṇa—カルナ; guru—ドローナーチャーリヤ; śalya—シャリヤ; camūṣu—陣形の只中で; adabhra—広大な; rājanya-varya—偉大な王子達; ratha-maṇḍala—馬車のつながり; maṇḍitāsu—〜で飾られて; agre caraḥ—前進している; mama—私のものの; vibho—偉大な王よ; ratha-yūtha-pānām—すべての御者達; āyur—寿命や果報的活動; manāmsi—心理的高まり; ca—もまた; dṛśā—見つめることで; sahaḥ—力; ojaḥ—強さ; ārcchat—撤回する。

すべての人々から寿命を奪いさるのは主だけであり、戦場では、ビーシュマ、カルナ、ドローナ、シャリヤたちを筆頭とするカウラヴァ軍が構成した巨大な陣形から、戦局への対応力や戦闘意欲を取りさったのです。彼らの陣形はきわめて巧妙に配備され、勝利を確信させるに充分でしたが、戦いが進むなかで、主シュリー・クリシュナはそれらをすべて奪いさったのです。

要旨解説

絶対人格主神、主シュリー・クリシュナは自らを拡張させ、完全拡張体パラマートマーとして全生命体の心臓のなかに住み、そして記憶、忘却、知識、知性の喪失、心の動きなどについて彼らを導いています（『ギター』 第15章・第15節）。至高主である主クリシュナは、生命体の寿命を延ばしたり縮めたりすることができます。こうして主は、自分の計画に応じてクルクシェートラの戦いを指揮したのです。主はユディシュティラをこの惑星の皇帝にするために戦争を望んだのであり、この超越的な事業を推しすすめるために、みずからの全能の意志をとおして、敵側にいた兵士すべてを殺しました。相手方は、ビーシュマ、ドローナ、シャリヤのような偉大な将軍に守られた軍力をそなえていましたから、主がありとあらゆる戦術を駆使しなかったら、アルジュナにはとうてい勝てる見込みはありませんでした。そのような戦術は政治家ならだれでも、また近代戦争でも使われていることですが、大がかりなスパイ活動、戦術、外交上策略をとおして物質的な手段でなされています。しかしアルジュナは主が愛情を寄

せる献愛者だったため、すべてにおいてアルジュナを不安におとしいれることなく行なわれました。それが主への献愛奉仕の方法です。

第 16 節

यदोःषु मा प्रणिहितं गुरुभीष्मकर्ण-
नसृत्रिगर्तशल्यसैन्धवबाह्लिकाद्यैः ।
अस्त्राण्यमोघमहिमानि निरूपितानि
नोपस्पृशुर्नुहरिदासमिवासुराणि ॥ १६ ॥

*yad-dohṣu mā praṇihitam guru-bhīṣma-karṇa-
napṭṛ-trigarta-śalya-saindhava-bāhlikādyaiḥ
astrāṇy amogha-mahimāni nirūpitāni
nopaspr̥śur n̄hari-dāsam ivāsurāṇi*

yat—～である者の下で; *dohṣu*—腕による保護; *mā praṇihitam*—位置されている私自身; *guru*—ドローナーチャーリヤ; *bhīṣma*—ビーシュマ; *karṇa*—カルナ; *napṭṛ*—ブーリシュラヴァー; *trigarta*—スシャルマー王; *śalya*—シャリヤ; *saindhava*—ジャヤドウラタ王; *bāhlika*—マハーラージャ・シャーンタヌ (ビーシュマの父) の兄弟; *adyaiḥ*—～など; *astrāṇi*—武器; *amogha*—克服できない; *mahimāni*—非常に力強い; *nirūpitāni*—適用した; *na*—～ではない; *upaspr̥śuḥ*—触れた; *n̄hari-dāsam*—ヌリシンハデーヴァの召使い (プラフラーダ) ; *iva*—～のような; *asurāṇi*—悪魔達によって使われた武器。

ビーシュマ、ドローナ、カルナ、ブーリシュラヴァー、スシャルマー、シャリヤ、ジャヤドウラタ、バーフリカなど、大將軍たちが無敵の武器で私を攻撃してきました。しかし主クリシュナの慈悲のおかげで、彼らは私の髪の毛1本にさえ触れることができませんでした。同じように、主ヌリシンハデーヴァの至上の献愛者プラフラーダ・マハーラージャは、自分に向けられた武器にみじんも動じることがありませんでした。

要旨解説

ヌリシンハデーヴァの偉大な献愛者、プラフラーダ・マハーラージャの生涯については『シユリーマド・バーガヴァタム』の第7編で述べられています。プラフラーダ・マハーラージャは5歳の幼い少年で、極悪な父ヒラニヤカシプにうとましがられていましたが、主の純粋な献

愛者だったからという理由だけで迫害されていたのです。この悪魔の父は、献愛者だった息子プラフラダを殺すためにさまざまな手段をつくりましたが、主の恩寵で、危険きわまる攻撃から完璧に守られていました。火のなかや沸騰する油のなかに入れられたり、丘の頂上から落とされたり、象の足で踏みつけられそうになったり、毒を盛られたりしました。父は最後にみずから剣を抜いて殺そうとしましたが、そこにヌリシンハデーヴァが現われ、その子の目のまゝで極悪非道の父を殺しました。これは、だれも主の献愛者は殺せないことを物語っています。同じように、あらゆる危険な武器がビーシュマを筆頭とする強大な敵から浴びせられましたが、アルジュナは主に救われました。

カルナ クンティーがマハーラージャ・パーンドウと結婚するまえに、太陽神とのあいだにもうけた子で、並外れた不屈の英雄の証しでもある腕輪やイヤリングなどに飾られて誕生しました。生まれた当時はヴァスセーナと呼ばれていましたが、成人すると、身につけて生まれた自然な腕輪やイヤリングをインドラデーヴァに捧げ、以来、ヴァイカルタナという名で知られるようになりました。カルナは、処女だったクンティーから誕生したあと、ガンジス川に流されました。そしてアディラタに拾われ、アディラタは妻ラーダーとともに自分の子として育てます。カルナはひじょうに慈善の心が篤く、とくにブラーフマナにはすべてを差し出すつもりでいました。その慈善の精神で、自分の腕輪やイヤリングをインドラデーヴァに捧げましたが、受けとったインドラデーヴァはその心意気にたいそう喜び、返礼としてシャクティという優れた武器を授けました。カルナはドロナーチャーリヤの生徒の一人として認められ、アルジュナとは出会ったときからライバル関係にありました。アルジュナとの敵対関係を見たドロナーチャーリヤは、彼を自分の付き添い人に加え、やがて強い親密な絆になっていきます。カルナはドラウパディーのスヴァヤンヴァラの式典に出席していましたが、会場で自分の力量を誇示しようとしたとき、ドラウパディーの兄が、シュードラである大工の子として生まれたカルナはこの試合には参加できない、と宣言しました。こうしてカルナは参加を断われましたが、アルジュナが天井に吊された魚の的を首尾よく射抜き、ドラウパディーがアルジュナに花輪を捧げ、アルジュナがドラウパディーとともに会場を去ろうとしたとき、落胆したほかの王子たちと一緒に猛然と攻撃をしかけ、道をふさごうとしました。とくにカルナは激しくアルジュナと戦いましたが、一人残らずアルジュナに撃破されました。ドゥリヨーダナはカルナを最良にしていましたが、それはアルジュナがいつもカルナと敵対関係にあったからであり、権力を掌握していたドゥリヨーダナは彼をアング国の王位に就任させました。カルナはドラウパディーと結婚できなかったはらいせに、ドゥリヨーダナにドゥルパダを攻撃するようけしかけます。勝てばアルジュナもドゥルパダも生け捕りにできる、と考えたからです。しかしドロ

ナーチャーリヤがその陰謀を反対したため、結局実行することはできませんでした。カルナはアルジュナだけではなく、ビーマセーナにも何度も敗北を喫しています。ベンガル、オリッサ、マドラスを合わせた地区の王でもありました。のちに、マハーラージャ・ユディシュティラが主宰したラージャスーヤ供儀祭では積極的に行動し、シャクニが膳立てをした敵対する兄弟同士間で賭博が行なわれたとき、カルナも参加し、ドラウパディーが賭に出されたとき、ほくそえみました。これが過去の遺恨に火をつけます。ドラウパディーが賭の対象になったとき、カルナはそのことを公に知らせましたが、ドウフシャーサナにパーンダヴァ兄弟とドラウパディーの衣服をはぎとるよう命じたのはカルナでした。そして、別の夫と選ぶようドラウパディーに要求します。パーンダヴァ兄弟が賭に負けたことで、彼女はクル家の奴隷にならざるをえなかったからです。カルナはいつもパーンダヴァ兄弟を敵視し、機会さえあれば、どのような手段を講じても彼らを屈服させようとしてきました。クルクシェートラの戦いでは、この戦争の結末を予知し、主クリシュナがアルジュナの御者になっているため、アルジュナに勝利の女神が微笑むことを知っていました。カルナはいつもビーシュマと意見を異にし、ときには強い自尊心ゆえに、ビーシュマが邪魔さえしなければパーンダヴァ兄弟を5日以内に始末できる、とも言っています。しかし、ビーシュマが戦死したときには大いに心を痛めました。カルナはインドラデーヴァから授かったシャクティ武器でガトートウカチャを殺しました。息子のヴリシャセーナはアルジュナに殺されています。またカルナはパーンダヴァ兄弟側のかんりの兵士を殺しました。最後にアルジュナと熾烈な争いを繰りひろげましたが、アルジュナの王冠を射落とせるのはカルナしかいませんでした。しかし戦いの途中、馬車の車輪が泥にはまり、カルナは馬車から降りて車輪を出そうとしたのですが、アルジュナはこの機に乗じ、攻撃しないよう嘆願するカルナを殺しました。

ナプター、別名ブーリシュラヴァー ブーリシュラヴァーはクル家の家族の一人であるソーマダッタの息子です。兄弟にシャリヤがいます。兄弟二人、そして父親もドラウパディーのスヴァヤンヴァラの式典に参加しました。全員が、主の献愛者で友人であるアルジュナの抜群の力を讃え、ブーリシュラヴァーは我が子であるドウリタラーシュトラの息子たちに口論や争いを仕掛けてはいけない、と助言をしました。また彼らはマハーラージャ・ユディシュティラのラージャスーヤの供儀祭に参加しています。ブーリシュラヴァーは、アクシャウヒニー（軍の単位）の1個連隊、軍隊、騎兵隊、象、戦闘馬車を持ち、それらはクルクシェートラの戦いでドウリョーナ軍のために使われました。ビーマはブーリシュラヴァーをユータ・パティの一人と考えていました。クルクシェートラの戦いでは、とくにサーチャキと死闘を演じ、サーチャキの10人の息子を殺しています。のちに、アルジュナが彼の手を切り落とし、最後にはサー

チャキに殺されました。戦死したあと、彼はヴィシュヴァデーヴァのなかに融合しました。

トゥリガルタ、*別名スシャルマー* マハーラージャ・ヴリッダクシェートラの息子で、トゥリガルタデーシャ国の王であり、ドラウパディーのスヴァヤンヴァラの式典に参加しました。ドゥリヨーダナの同盟者の一人で、ドゥリヨーダナにマトウツシャデーシャ（ダルバンガ）国を攻撃するよう助言をしました。ヴィラータ・ナガラで起こった牛の盗難事件では、マハーラージャ・ヴィラータを捕らえることができたが、のちに彼はビーマによって解放されました。クルクシェートラの戦いでは勇敢に戦ったものの、最後にアルジュナに殺されました。

ジャヤドゥラタ マハーラージャ・ヴリッダクシェートラのもう一人の息子。シンドウデーシャ（現在のシンドウ・パキスタン）の王。妻の名はドウフシャラー。ドラウパディーのスヴァヤンヴァラの式典に列席し、彼女との結婚を強く望んだのですが、試合で敗北します。しかしそれ以来、ドラウパディーをしつこく追うようになり、あるとき、シャリヤデーシャでの結婚式に向かっているとき、途中のカーミャヴァナでふたたびドラウパディーに出会い、以前にもましてその美しさに心を奪われました。当時パーンダヴァ兄弟とドラウパディーは、賭博で王国を失って追放生活をおくっており、ジャヤドゥラタは、自分の仲間の一人であるコーティシャツシャをとおして、不義の関係を迫ります。ドラウパディーはジャヤドゥラタの申し出をすぐに断固として断りますが、ドラウパディーの美しさに目がくらんでいる彼は、執拗に迫りました。しかしそのたびにドラウパディーに断われます。そして彼は、彼女を強引に馬車で連れさろうとするのですが、ドラウパディーに突きとばされ、根本から切り倒された木のように倒れました。ジャヤドゥラタはひるまず、彼女を力づくで馬車に座らせました。この事件の一部始終を見ていたのがダウミヤ・ムニで、ジャヤドゥラタの行動を厳しく叱責します。ムニは馬車を追跡しましたが、このことはダートウレイキーをとおしてマハーラージャ・ユディシュティラに知らされました。パーンダヴァ兄弟はジャヤドゥラタの軍を攻撃して全滅させ、最後にビーマがジャヤドゥラタを捕らえて激しく殴打し、半殺しにしました。そして5本の毛髪を残して丸坊主にされ、マハーラージャ・ユディシュティラの奴隷として国王たちのまえに引き出されます。そして、ユディシュティラ王の奴隷であることを居ならぶ王子たちの前で認めるよう強いられ、さらにユディシュティラ王本人のまえに連れてこられました。心優しいマハーラージャ・ユディシュティラはすぐに彼を放免するよう命じ、これにドラウパディーも同意します。ジャヤドゥラタはこうして自分の国に戻ることを許されました。これほどの侮辱を受けた彼はヒマラヤのガンゴートゥリに行き、主シヴァを喜ばせるために厳しい修行に打ちこみます。そしてパーンダヴァ兄弟全員に勝てる、あるいは少なくとも一人だけにでも勝つ、という恩恵を求めました。そしてクルクシェートラの戦いが始まり、彼はドゥリヨーダナの側

につきました。戦闘開始1日目、彼はマハーラージャ・ドウルパダと戦い、次にヴィラータ、そしてアビマンニュと戦います。アビマンニュが7人の大將軍たちに包圍されて無慈悲に殺されようとしていたとき、パーンダヴァ兄弟はジャヤドゥラタに助けてくれるよう乞いました。しかし彼は拒絶し、主シヴァの慈悲で授かった驚くべき腕力を使って攻撃してきました。このときアルジュナはジャヤドゥラタを殺す誓いをたてましたが、その言葉を聞いておののいたジャヤドゥラタは戦場から逃亡しようと考え、この臆病な行為を許してくれるようカウラヴァ兄弟たちに嘆願しました。しかしそれは許されず、反対にアルジュナと戦うはめになります。二人の戦いが続いていたとき、主クリシュナはアルジュナに、シヴァがジャヤドゥラタに与えた恩恵は、彼の頭を地面に落とした者はだれであろうとすぐに死ぬ、というものでした。そして主はアルジュナに、ジャヤドゥラタの頭を、当時サマンタ・パンチャカという巡礼地で苦行をしていた彼の父親の膝に直接投げつけるように助言をしました。アルジュナはその助言を実行し、矢を放ってジャヤドゥラタの頭を切りはなし、その首をジャヤドゥラタの父の元に飛ばしました。自分の膝の上に生首が飛んできたことに驚いた父は、すぐにそれを地面に投げつけました。その結果、ジャヤドゥラタの父の額は7つに裂け、命を落としたのでした。

第17節

सौत्ये वृत्तः कुमतिनात्मद ईश्वरो मे
यत्पादपद्ममभवाय भजन्ति भव्याः ।
मां श्रान्तवाहमरयो रथिनो भुविष्ठं
न प्राहरन् यदनुभावनिरस्तचित्ताः ॥ १७ ॥

*sautye vṛtaḥ kumatinātmada īśvaro me
yat-pāda-padmaṁ abhavāya bhajanti bhavyāḥ
mām śrānta-vāham arayo rathino bhuvi-ṣṭham
na prāharan yad-anubhāva-nirasta-cittāḥ*

sautye—戦闘馬車に関して; *vṛtaḥ*—従事して; *kumatinā*—悪い意識によって; *ātma-daḥ*—救う者; *īśvaraḥ*—至高主; *me*—私の; *yat*—～である者の; *pāda-padmaṁ*—蓮華の御足; *abhavāya*—解放に関連して; *bhajanti*—奉仕をする; *bhavyāḥ*—知的階級の人々; *mām*—私に; *śrānta*—喉が乾いて; *vāham*—私の馬達; *arayaḥ*—敵; *rathinaḥ*—偉大な將軍; *bhuvi-ṣṭham*—地面に立っているとき; *na*—～ではない; *prāharan*—攻撃した; *yat*—～である者の; *anubhāva*—慈悲; *nirasta*—不在で; *cittāḥ*—心。

喉の渴いた馬たちに水に飲ませるために馬車から降りた私を、敵将たちは殺そうともしませんでしたが、それはひとえに主の慈悲にほかなりません。また、主が私の御者になってくださることを受けいれてしまったのは、私の主に対する崇敬の念の足らなさにほかなりません。主は、解放を目ざすもっとも優れた人々によって崇拜され、奉仕を受けている方なのです。

要旨解説

至高主、そして人格主神であるシュリー・クリシュナは、非人格論者と主の献愛者どちらにも崇拜されている方です。非人格論者は、主の永遠で、喜びと知識に満ちた崇高な体から出ているまばゆい光輝を崇拜し、いっぽう献愛者は最高人格主神その方として崇拜します。非人格論者よりも考え方が劣る人たちでさえ、主を、ある偉大な歴史的人物として考えます。しかし主は、崇高な娯楽をとおしてすべての人々を魅了するために降誕するのであって、そうすることで、もっとも完璧な主人、友人、息子、愛人としての役割を演じます。アルジュナとの超越的な関係は友人でしたから、その役割を完璧に演じ、それは両親たち、愛人たち、妻たちとのあいだでも同じように演じられています。そのような完璧で超越的な関係にいるあいだ、献愛者たちは主の内的力ゆえに、自分の友人や息子が最高人格主神であることを忘れてしまい、またときには、主のふるまいに惑わされることもあります。主が物質界を去ったあと、アルジュナは自分の偉大な友人のことをいつも思っていました。アルジュナがしたことにはまちはがいはなかったし、主をまちがって評価したわけでもありません。知性ある人は、アルジュナのような純粋な献愛者とのあいだで交わされる主の超越的な活動に魅了されるものです。

戦争では水がたりなくなるのは周知の事実です。戦場では水はたいへん貴重なものとなり、戦場で奮闘している動物や人間には、喉の渴きを癒す水はいつでも必要なものです。特に傷ついた兵士や将軍は死ぬときにひじょうに喉が渴き、ときには水がないばかりに死んでいくことも避けられません。しかし、戦場における水不足は地面に穴を掘ることで解決しました。神の摂理で、地面に穴を掘る設備があれば、水はどこでもかんたんに手に入ります。現代でも地面に穴を掘る方法が使われていますが、現代の技術者は、どこでもすぐに掘ることはできません。しかし、パーンダヴァ兄弟たちの時代まで遡ると、アルジュナのような偉大な将軍たちはすぐに馬にでさえ水が飲ませられたのですから、人間はいうまでもありません。それは、鋭い矢を地面に放ち、地層を貫いて地下から水を取り出すという方法であり、現代社会では知るよしもありません。

第18節

नर्माण्युदाररुचिरस्मितशोभितानि
हे पार्थ हेऽर्जुन सखे कुरुनन्दनेति ।
सञ्जल्पितानि नरदेव हृदिस्पृशानि
स्मर्तुर्लुठन्ति हृदयं मम माधवस्य ॥ १८ ॥

narmāṅy udāra-rucira-smita-śobhitāni
he pārtha he 'rjuna sakhe kuru-nandaneti
sañjalpitāni nara-deva hṛdi-sprśāni
smartur luṭhanti hṛdayam mama mādhasya

narmāṅi—冗談を交わして; udāra—ざっくばらんに話して; rucira—心地よい; smita-śobhitāni—微笑みで飾られて; he—呼びかけの言葉; pārtha—プリターの子よ; he—呼びかけの言葉; arjuna—アルジュナ; sakhe—友人; kuru-nandana—クル家の子; iti—など; sañjalpitāni—そのような会話; nara-deva—王よ; hṛdi—心; sprśāni—感動的な; smartuḥ—それらを思い出すことで; luṭhanti—圧倒されて; hṛdayam—熱心に; mama—私の; mādhasya—マードヴァ (クリシュナ) の。

王よ！ 主との冗談やざっくばらんな会話は心地よく、主の微笑みで美しく飾られています。主が私に「プリターの子よ、友よ、クル家の子よ」などと呼びかけられ、その心優しさを思いかえすたびに、私は悲しみに沈んでいるのです。

第 19 節

शय्यासनाटनविकत्थनभोजनादि-
ष्वैक्याद्वयस्य ऋतवानिति विप्रलब्धः ।
सख्युः सखेव पितृवत्तनयस्य सर्वं
सेहे महान्महितया कुमतेरघं मे ॥ १९ ॥

śayyāsanāṭana-vikatthana-bhojanādiṣv
aikyād vayasya ṛtavān iti vipralabdhaḥ
sakhyuḥ sakheva pitṛvat tanayasya sarvaṁ
sehe mahān mahitayā kumater agham me

sayyā—1つのベッドの上で眠っている; *āsana*—1つの椅子に座っている; *aṭana*—一緒に歩いている; *vikatthana*—自分を讃えること; *bhojana*—一緒に食事をしている; *ādiṣu*—そして、そのような付き合い方すべてにおいて; *aikyāt*—一体性ゆえに; *vayasya*—友よ; *ṛtavān*—誠実な; *iti*—そのように; *vipralabdhaḥ*—不作法; *sakhyuḥ*—友人に; *sakhā iva*—ちょうど友人のように; *pitṛvat*—ちょうど父親のように; *tanayasya*—子どもの; *sarvam*—すべて; *sehe*—耐えた; *mahān*—偉大な; *mahitayā*—栄光によって; *kumateḥ*—低い意識を持つ者の; *agham*—侮辱; *me*—私のもの。

よく私たちは、いっしょに住み、眠り、座り、そぞろ歩きをすることがありました。そして自分の騎士道精神のことを自慢するときにまちがったことを言ったりすると、私はよく「友よ、きみはとても誠実な人だねえ」と皮肉っぽくのがめたりしたものです。自分がそのように過小評価されても、主は、至高の魂ですから、私のそんな失礼な言葉に耐えてくださった。ほんとうの友がほんとうの友を許すように、父親が子を許すように、私を許してくださったのです。父親が子どもを許すように。

要旨解説

至高主シュリー・クリシュナは、あらゆる面で完璧な方ですから、純粋な献愛者との崇高な娯楽にはどのような点から見ても、友人、あるいは息子や愛人だとしても、不備なところはありませぬ。主は、偉大で博識な学者やありきたりの宗教家がうやうやしく捧げるヴェーダの聖歌よりも、友人、両親、恋人からの非難を味わっているのです。

第20節

सोऽहं नृपेन्द्र रहितः पुरुषोत्तमेन
सख्या प्रियेण सुहृदा हृदयेन शून्यः ।
अध्वन्युरुक्रमपरिग्रहम् । रक्षन्
गोपैरसद्भिरबलेव विनिर्जितोऽस्मि ॥ २० ॥

so 'ham nṛpendra rahitaḥ puruṣottamena
sakhyā priyeṇa suhrdā hṛdayena śūnyaḥ
adhvany urukrama-parigraham aṅga rakṣan
gopair asadbhir abaleva vinirjito 'smi

saḥ—それ; *aham*—私自身; *nṛpa-indra*—皇帝よ; *rahitaḥ*—～を奪われて; *puruṣa-uttamena*—至

高主によって; sakhyā—友人によって; priyeṇa—私のもっとも愛しい方によって; suhṛdā—幸せを望む方によって; hṛdayena—身も心も; śūnyah—空虚な; adhvani—最近; urukrama-parigraham—完全な力を持つ方の妻達; aṅga—体; rakṣan—守っている間; gopaiḥ—牛飼達によって; asadbhiḥ—不信心者によって; abalā iva—弱い女性のように; vinirjitaḥ asmi—私は敗北した。

皇帝よ。いま私は、友でもあり、私の幸せを願ってくれるもっとも愛しい方でもある最高人格主神と離ればなれになり、そのため、私の心からすべてがなくなったような空しさを感じています。主がいないあいだ、私がクリシュナの奥方たちの体を守っていたあいだ、私は不信心な牛飼いたちに勝つことができなかったのです。

要旨解説

この節で重要なことは、なぜアルジュナが卑しい牛飼いたちに負けたのか、卑俗な牛飼いたちがなぜ、アルジュナに守られていた主クリシュナの妻たちの体に触れることができたのか、という点にあります。シュリーラ・ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティー・タークラは、『ヴィシュヌ・プラーナ』と『ブラフマ・プラーナ』を比較分析することで、この矛盾点を明確に説明しています。あるとき天界の美しい女性たちが、アシュターヴァクラ・ムニに巧みに仕えて満足させることができ、ムニは至高主を夫として迎えることのできる恩恵を女性たちに授けました。アシュターヴァクラ・ムニは、体の8カ所の関節が曲がっていたため、独特の変った動きで歩いていました。彼女たちはその動きを見て笑いを抑えることができず、ムニはそんな彼女たちに怒りをおぼえ、「たとえ主を夫にしても、おまえたちは悪漢たちに誘拐される」と呪いました。のちに、彼女たちは祈りを捧げてふたたびムニを喜ばせることができ、ムニは「悪人たちに誘拐されたあとでも、夫を取りもどすことができる」と祝福しました。主はこの偉大なムニの言葉を守るために、アルジュナに守られていた自分の妻たちをみずから誘拐したのです。主がそうしなかったら、彼女たちは悪漢たちに触られたとたんに死んでしまったことでしょう。それに、主の妻になることを祈ったゴーピーたちのなかには、その望みが実現されたあと、それぞれ自分の家に戻っています。主クリシュナは、自分が物質界から去ったあと、自分にまつわる物事すべてがふたたび精神界に帰っていくよう考えていましたし、その帰っていく条件がそれぞれ異なっていただけなのです。

第21節

तद्वै धनुस्त इषवः स रथो ह्यास्ते
सोऽहं रथी नृपतयो यत आनमन्ति ।
सर्वं क्षणेन तदभूदसदीशरिक्तं
भस्मन् हुतं कुहकराद्धमिवोसमूष्याम् ॥ २१ ॥

*tad vai dhanus ta iṣavaḥ sa ratho hayās te
so 'ham rathī nṛpatayo yata ānamanti
sarvaṁ kṣaṇena tad abhūd asad īśa-riktam
bhasman hutam kuhaka-rāddham ivoṣtam ūṣyām*

tat—同じもの; vai—確かに; dhanuḥ—同じ弓; te iṣavaḥ—矢; saḥ—まったく同じもの; rathaḥ—馬車; hayāḥ te—まったく同じ馬達; saḥ aham—私は同じアルジュナである; rathī—馬車の戦士; nṛpatayaḥ—すべての王達; yataḥ—～である者に; ānamanti—彼らの敬意を捧げた; sarvam—すべて; kṣaṇena—その瞬時の告知; tat—それらすべて; abhūt—～になった; asat—無価値な; īśa—主ゆえの; riktam—空虚で; bhasman—灰; hutam—バターを捧げている; kuhaka-rāddham—魔術によって集められた金; iva—～のようなもの; uṣtam—植えて; ūṣyām—不毛の土地の。

私は今でも、同じガンディーヴァの弓を、同じ矢を、同じ馬に引かれた同じ馬車を持っていますし、あらゆる国王たちが敬意を捧げた以前と変わらぬアルジュナとしてそれらを使っています。ところが、主クリシュナが姿を消されてしまったいま、そのすべてが、告知されたある瞬間から、まったく価値のないものになってしまいました。それはまさに、灰に精製されたバターを捧げるようなもの、魔法の杖で金を集めるようなもの、不毛の土地に種を植えるようなものです。

要旨解説

これまで何度も話してきたことですが、「借りているだけの羽根飾り」で慢心してはいけません。すべてのエネルギーや力は、至高の源、すなわち主クリシュナから得られるのであり、それは主が望んでいるかぎり機能し、主が引き込めたとたんに機能しなくなります。電気エネルギーは発電所から送られてくるものであり、発電所が電力を供給しなくなれば、その瞬間から電球はなんの役にもたちません。瞬時のうちに、主の至高の意志によって、どのようなエネルギーも作られたりなくなったりするのです。主に祝福されていない物質文明は子どもの遊びと同じです。子どもの遊びは、親が許していれば問題はありません。しかし親がやめさせれば、

その子はそれ以上遊べなくなります。人間文化やそれに関する活動すべては、主の至高の祝福に支えられていなくてはなりませんし、その祝福がなければ、人間文化の発達は死体のデコレーションと同じです。ここでは、死んだ文化もその活動も、いわば、灰の上に精製されたバターを注ぐこと、魔法の杖で金を集めること、そして不毛の土地に種を植えるようなもの、とされています。

第 2 2 - 2 3 節

राजंस्त्वयानुपृष्टानां सुहृदां नः सुहृत्पुरे ।
 विप्रशापविमूढानां निघ्नतां मुष्टिभिर्मिथः ॥ २२ ॥
 वारुणी मदिरां पीत्वा मदोन्मथितचेतसाम् ।
 अजानतामिवान्योन्यं चतुःपञ्चावशेषिताः ॥ २३ ॥

*rājams tvayānupṛṣṭānām
 suhṛdām naḥ suhṛt-pure
 vipra-śāpa-vimūḍhānām
 nighnatām muṣṭibhir mithaḥ
 vāruṇīm madirām pītvā
 madonmathita-cetasām
 ajānatām ivānyonyam
 catuḥ-pañcāvaśeṣitāḥ*

rājan—王よ; tvayā—あなたによって; anupṛṣṭānām—あなた尋ねたとおりに; suhṛdām—友人や親族の; naḥ—私達の; suhṛt-pure—ドウヴァーラカーの都市の; vipra—ブラーフマナ達; śāpa—～の呪いによって; vimūḍhānām—騙された者の; nighnatām—殺された者の; muṣṭibhiḥ—棒の束で; mithaḥ—彼ら同士で; vāruṇīm—発酵した米; madirām—酒; pītvā—飲んで; mada-unmathita—陶酔して; cetasām—その心理状態で; ajānatām—認識できなくなった者の; iva—～のような; anyonyam—互いに; catuḥ—4; pañca—5; avaśeṣitāḥ—今残っている。

王よ。ドウヴァーラカーにいる私たちの友や親族についてお尋ねになったから、お知らせしましょう。彼らはことごとくブラーフマナたちに呪われ、その結果、米の醸造酒を飲んだあげく、だれかれの見境もつかなくなるほど酔っぱらい、棒で互いに殺しあいました。いま残って

いるのは4人か5人。あとは一人残らず死んでしまいました。

第24節

प्रायेणैतद् भगवत् ईश्वरस्य विचेष्टितम् ।
मिथो निघ्नन्ति भूतानि भावयन्ति च यन्मिथः ॥ २४ ॥

*prāyeṇaitad bhagavata
īśvarasya viceṣṭitam
mitho nighnanti bhūtāni
bhāvayanti ca yan mithaḥ*

prāyeṇa etat—それはほとんど～による; *bhagavataḥ*—人格主神の; *īśvarasya*—主の; *viceṣṭitam*—～の意志によって; *mithaḥ*—互いに; *nighnanti*—殺す; *bhūtāni*—生命体達; *bhāvayanti*—また守る; *ca*—もまた; *yan*—～である者の; *mithaḥ*—互いに。

ほんとうに、これは人格主神の至上の意志あつてのことです。人はときに殺しあい、またときに互いを守ろうとします。

要旨解説

人類学者は、生存競争と適者生存という自然の法則がある、と言います。しかし彼らが見落としているのは、その背後に最高人格主神の至上の指揮があるという事実です。『バガヴァッド・ギーター』は、自然の法則は主の指揮下で動いている、と確証しています。ですから、世界が平和であれば、それは主のすばらしい意志が働いている証しと考えなくてはなりません。そして世界が動乱状態にあれば、それも主の至上の意志によるものです。1枚の葉でさえ、主の意志なくして動くことはありません。ですから、主によって定められた規定原則が無視されれば、人同士、あるいは国同士の戦争が起こります。だからこそ、平和への確かな道は、すべてを主が確立した規則と一致させることにあります。確立された規則とは、なにをしようと、なにを食べようと、なにを犠牲にしようと、あるいはなにを慈善として施そうと、それは主を完全に満足させるためになすべきだということです。主の意志に反して、なにかをする、なにかを食べる、なにかを犠牲にし、慈善を施すべきではありません。思慮深さは勇氣という優れた気質の一部ですが、主を喜ばせる活動とそうではない活動の違いをどう判断するか、学ばなくてはなりません。活動とは、主の喜びにつながるのか、あるいは主の不満につながるかで判

断されるべきものです。自分のきまぐれで決定してはなりません。いつでも、主の喜びによって導かれなくてはならないのです。そのような行動を『バガヴァッド・ギーター』（第2章・第50節）は、*yogaḥ karmasu kauśalam*（ヨーガハ カルマス カウシャラム）、すなわち至高主と結ばれてなされる活動、といいます。それが物事を完璧に実践する秘訣です。

第25－26節

जलौकसां जले यद्वन्महान्तोऽदन्त्यणीयसः ।
दुर्बलान्बलिनो राजन्महान्तो बलिनो मिथः ॥ २५ ॥
एवं बलिष्ठैर्यदुभिर्महद्भिरितरान् विभुः ।
यदून् यदुभिरन्योन्यं भूभारान् सञ्जहार ह ॥ २६ ॥

*jalaukasām jale yadvan
mahānto 'danty aṇīyasaḥ
durbalān balino rājan
mahānto balino mithaḥ*

*evam baliṣṭhair yadubhir
mahadbhir itarān vibhuḥ
yadūn yadubhir anyonyaṁ
bhū-bhārān sañjahāra ha*

jalaukasām—水生動物の; *jale*—水中の; *yadvat*—～であるように; *mahāntaḥ*—より大きな者達; *adanti*—飲み込む; *aṇīyasaḥ*—より小さな者達; *durbalān*—弱い者; *balinaḥ*—より強い者; *rājan*—王よ; *mahāntaḥ*—もっとも強い者; *balinaḥ*—それほど強くない; *mithaḥ*—両者間で; *evam*—そのように; *baliṣṭhaiḥ*—もっとも強い者によって; *yadubhiḥ*—ヤドゥ家の子孫によって; *mahadbhiḥ*—より強い力を持つ者; *itarān*—共通の者達; *vibhuḥ*—最高人格主神; *yadūn*—ヤドゥ家全員; *yadubhiḥ*—ヤドゥ家によって; *anyonyam*—互いの間で; *bhū-bhārān*—世界の重荷; *sañjahāra*—降ろされて; *ha*—過去に。

王よ。海中で、大きく強い生物が小さく弱い生物を飲みこむように、最高人格主神も、地球の重荷を軽くするために、強いヤドゥ家が弱いヤドゥ家、大きなヤドゥ家が小さなヤドゥ家を殺すよう仕向けました。

要旨解説

物質界では生存競争と適者生存は避けられない法則です。この世界では、だれもが物質資源を支配しようとする望みを持っているために彼らのあいだに不釣り合いが生じるからです。物質自然界を支配しようとするその心理こそが、条件づけられた生活の根本原因です。そして主の幻想エネルギーが、その模倣の主人たちに便宜を提供するために、生命体のなかに強い者と弱い者を作り、条件づけられた生命体のあいだにその不均衡を作りだしました。物質自然界や創造世界を支配しようとする考えゆえに、不均衡が生じ、さらにその結果として生存競争の法則も作りだされました。精神界にはそのような不均衡も生存競争もありません。だれもが永遠に存在しているから生存競争はありません。だれもが至高主に仕えたいと思い、そして自分が恩恵を受ける側になろうというイミテーションの主になりたいとはだれも思わないから、不均衡は生じません。主は、生命体を含む一切万物を創造した方ですから、存在するものすべてのほんとうの所有者あるいは享樂者ですが、物質界では、マヤー・幻想の魔力のために、最高人格主神との永遠の関係は忘れられており、そのために、生命体は生存競争と適者生存の法律に条件づけられています。

第 27 節

देशकालार्थयुक्तानि हृत्तापोपशमानि च ।
हरन्ति स्मरतश्चित्तं गोविन्दाभिहितानि मे ॥ २७ ॥

deśa-kālārtha-yuktāni
hṛt-tāpoṣamāni ca
haranti smarataś cittam
govindābhitāni me

deśa—空間; *kāla*—時; *artha*—重要性; *yuktāni*—〜で植えつけられて; *hṛt*—心; *tāpa*—燃えている; *uṣamāni*—消している; *ca*—そして; *haranti*—引きつけている; *smarataḥ*—思い出すことで; *cittam*—思考; *govinda*—喜びの最高主神; *abhitāni*—〜によって語られた; *me*—私に。

いま私は人格主神(ゴヴィンダ)によって私に授けられた数々の教えに魅了されています。あらゆる時代や空間という状況で、物質界の炎に焼かれている苦しむ心を癒す教えで満たされているからです。

要旨解説

ここでアルジュナは、クルクシェートラの戦場で主から授けられた『バガヴァッド・ギーター』の教えについて話しています。主が『バガヴァッド・ギーター』の教えをこの世に残したのは、ただアルジュナのためだけではなく、あらゆる時代や場所の人々のためでもありました。

『バガヴァッド・ギーター』は最高人格主神によって語られたものですから、ヴェーダの知恵の真髄です。ウパニシャッド、プラーナ、『ヴェーダנט・スートラ』など、歴大なヴェーダ経典を研究する時間のほとんどない人々すべてのために、主自身によってじつに巧みに説かれました。知性に欠ける階級の人々、つまり女性、労働者、そしてブラーフマナ、クシャトリヤ、ヴァイシャ階級でも高い地位にある人々のため偉大な史書『マハーバーラタ』のなかに組みこまれています。クルクシェートラの戦場でアルジュナの心に湧き起こった問題は、『バガヴァッド・ギーター』の教えによって解消されました。主が地球の人々の視界から消えさったあと、授かった力や名声が征服されるという事態にふたたび直面したアルジュナは、『バガヴァッド・ギーター』の気高い教えをもういちど味わいたいと考えました。それは『バガヴァッド・ギーター』が、あらゆる心の苦しみを慰めてくれるだけでなく、人を苦しめる危機的状況という厳しい束縛から抜けだす方法さえ含む、どのような苦境にあっても頼ることのできる知識の対象であることを、興味を持つ人々すべてに教えるためでした。

慈悲深い主は、『バガヴァッド・ギーター』というすばらしい教えを私たちに残しましたが、それは、物質的な目しか持たないために主を見ることのできない私たちが主の教えを授かるように、という配慮だったのです。物質的な感覚では至高主の偉大さを理解することはできませんが、主は想像を絶する力を使い、主の具現されたエネルギーの別の姿でもある物質の代理をとおして、適切な方法で、条件づけられた魂の知覚力に合わせて化身として現われます。このように、『バガヴァッド・ギーター』にしても、また主の典拠ある経典という音の表われも、化身と言えます。主の言葉の表われと主自身に違いはありません。私たちは、アルジュナが主とじかに接触して得た同じ恩恵を『バガヴァッド・ギーター』から得られるのです。

物質存在の束縛から解放されることを望んでいる忠実な人は、『バガヴァッド・ギーター』の恩恵をかんたんに受けとることができますから、主はその考えにもとづき、あたかもアルジュナが必要としていたかのように教えを授けました。『バガヴァッド・ギーター』には、5種類の重要な知識が描写されています。それは(1)至高主、(2)生命体、(3)自然、(4)時と空間、そして(5)活動の方法です。このなかで、至高主と生命体は質から見れば一つです。両者の違いは「全体と部分の違い」です。自然は自動力のない物質であり、3種類の様式の相互作用として表われ、永遠の時と空間は物質自然界を超えていると考えられています。生命体の活動にはさ

さまざまな素質が含まれており、それが生命体を物質自然界のなかで束縛させもし、また解放もさせてくれます。この主題はすべて『バガヴァッド・ギーター』で簡潔に述べられており、さらにその主題は、私たちがより深く啓蒙させるために『シュリーマド・バーガヴァタム』で詳細に述べられています。この5つの主題のなかで、至高主、生命体、自然、時と空間は永遠ですが、生命体、自然、時は、絶対的で一切の支配に影響されない至高主の指揮下で動いています。至高主こそ、最高の支配者なのです。生命体の物質的な活動には始まりがありませんが、精神的な質に変えることで、矯正することができます。そして物質的な反動を終わらせることができます。主も生命体も意識を持つ存在であり、どちらも生命力としての意識をそなえているため、自己を認識する感覚を持っています。しかし、生命体はマハトウ・タットヴァという物質自然界の条件下にいるために、自分と主は違う存在である、とまちがって認識することがあります。ヴェーダの知恵にこめられた計画はすべて、そのような誤解を根絶し、その結果、生命体を物質的な同一視という幻想から解放させるために定められています。そのような幻想が知識と放棄心によって根絶させられると、生命体は責任ある活動者に、そして享樂者にもなります。主が持っている楽しもうとする感覚は真実ですが、生命体を持つ同じ感覚は、いわば楽しもうとするだけの望みにすぎません。この意識の違いは、二人の、すなわち主と生命体の自己同一性の違いです。それ以外に、主と生命体のあいだに違いはありません。ですから生命体は永遠に同時に一つで異なる存在です。『バガヴァッド・ギーター』の教え全体がこの原則にのっとっています。

『バガヴァッド・ギーター』では、主と生命体はどちらもサナータナ (sanātana) ・永遠であると述べられており、物質空間をはるかに超えた主の住居もサナータナと表現されています。生命体は、魂の解放された活動が行なわれている主のサナータナの世界に来よう誘われており、生命体をその住居に近づけてくれる方法をサナータナ・ダルマといいます。しかし、物質的な自己認識から解放されていなければ主の永遠の住居に入ることはできませんし、『バガヴァッド・ギーター』は、この完璧な境地に辿りつく手がかりを私たちに説いています。物質的な自己認識から解放される方法は、さまざまな段階で、果報的活動、経験主義敵哲学、献愛奉仕と呼ばれ、最終的に超越的な悟りに導いてくれます。その超越的な悟りは、主に関連して用意されている方法すべてを実践することで実現できます。人類に定められた義務は、ヴェーダに示されているように、条件づけられた魂の罪な心を徐々に清め、そして知識の段階に高めてくれます。獲得した知識によって浄化された段階が、主への献愛奉仕の礎(いしづえ)になります。人生の問題解決を研究する段階の知識はギャーナ、すなわち浄化された知識と呼ばれますが、人生の真実の解決を悟った段階にいる人は、主への献愛奉仕に固定されます。『バガヴァッド・

ギター』は、魂と物質要素は違った存在であり、魂はどのような状況でも不滅だとするあらゆる理由と論点で証明することから始まり、物質という外側の覆いである肉体と心は、苦しみに満ちた物質存在におけるさまざまな状況に応じて変化する、と教えています。ですから『バガヴァッド・ギター』は、すべての苦しみに終止符を打つためにあり、アルジュナは、クルクシェートラの戦場で授けられたこの偉大な知識に身をゆだねているのです。

第28節

सूत उवाच

एवं चिन्तयतो जिष्णोः कृष्णपादसरोरुहम् ।
सौहार्देनातिगाढेन शान्तासीद्धिमला मतिः ॥ २८ ॥

sūta uvāca

evam cintayato jiṣṇoḥ

kṛṣṇa-pāda-saroruham

sauhārdenātigādhena

śāntāsīd vimalā matiḥ

sūtaḥ uvāca—スータ・ゴースヴァーミーが言った; *evam*—このように; *cintayataḥ*—その教えを
考えていた間; *jiṣṇoḥ*—最高人格主神の; *kṛṣṇa-pāda*—クリシュナの御足; *saroruham*—蓮華に似
ている; *sauhārdena*—深い友情で; *ati-gādhena*—強い親密さの中で; *śāntā*—なだめられて; *āsīt*—
それはそのようになった; *vimalā*—物質的な穢れがまったくない; *matiḥ*—心。

スータ・ゴースヴァーミーが言った。「こうして、強い親密な友情をとおして授けられた主の教えへの思いに深く没頭していたアルジュナの心は、慰められ、そしてあらゆる物質的な穢れから解放された」

要旨解説

主は絶対的な方ですから、主を深く瞑想することはヨーガのトランス状態と同じです。主は、主の名前、姿、質、娯楽、主にまつわる物事、特定の活動とまったく同じです。アルジュナは、主がクルクシェートラの戦場で説いた教えについて考えはじめました。そしてその教えだけによって、アルジュナの心にある物質的な穢れは消えていきました。主は太陽のような方です。太陽の出現は、暗闇あるいは無知がまたたくまにかき消されるということであり、主が献愛者

の心に出現すれば、すぐに、苦しい物質的影響は追い払われます。ですから、主チャイタンニャは、物質界の一切の穢れから守られるためにいつも主の名前を唱えるよう、私たちに勧めました。主から離れている思いは、献愛者にとってはもちろんつらいことですが、それは主と関係していることですから、心を癒す特別の超越的な力があります。その惜別の念は崇高な至福の源にもなるのであり、物質的で穢れた通俗な別れの感情とは比べものにはなりません。

第 29 節

वासुदेवाङ्घ्र्यनुध्यानपरिबृंहितरंहसा ।
भक्त्या निर्मथितारोषकषायधिषणोऽर्जुनः ॥ २९ ॥

vāsudevāṅghry-anudhyāna-
paribṛ̥mhita-ramhasā
bhaktyā nirmathitāśeṣa-
kaṣāya-dhiṣaṇo 'rjunaḥ

vāsudeva-aṅghri—主の蓮華の御足; anudhyāna—絶え間ない追憶; paribṛ̥mhita—広がった; ramhasā—急速に; bhaktyā—献身的思いで; nirmathita—静まって; aśeṣa—無限の; kaṣāya—力; dhiṣaṇaḥ—考え方; arjunaḥ—アルジュナ。

主シュリー・クリシュナの蓮華の御足に対する途切れることのない追憶が、主への強い献身の思いを急速に高め、その結果、アルジュナの心にあったゴミ屑はすべて跡形もなく消えていった。

要旨解説

心のなかにある物質的な望みは、物質的な穢れというゴミ屑にすぎません。生命体はその穢れのために、精神的正体としての存在を悟らせまいとする多くの幸福や苦しみに直面します。条件づけられた魂は、なんども誕生を繰り返すなかで、偽りでその場かぎりの快適・不愉快な物事に巻きこまれています。それらは、物質的な望みに私たちが反応するために蓄積されるのですが、献愛奉仕をとおして主の多様なエネルギーのなかで超越的な主と触れあうとき、物質的な望みの幻想や非現実性が如実に示され、生命体は超越的な知性をとおしてその正体を見抜き、自分の真の境地を悟り、至福に満たされるのです。アルジュナは、『バガヴァッド・ギーター』で教えられているように、主の教えに思いを集中させたその瞬間から、主との永遠な

交流の本質が表わされ、こうして、彼は物質的な穢れすべてから解放されました。

第30節

गीतं भगवता ज्ञानं यत् तत् सङ्ग्राममूर्धनि ।
कालकर्मतमोरुद्धं पुनरध्यगमत् प्रभुः ॥ ३० ॥

*gītaṁ bhagavatā jñānaṁ
yat tat saṅgrāma-mūrdhani
kāla-karma-tamo-ruddhaṁ
punar adhyagamat prabhuḥ*

gītam—教えられた; *bhagavatā*—人格主神によって; *jñānam*—超越的知識; *yat*—～であるもの; *tat*—それ; *saṅgrāma-mūrdhani*—戦いの只中で; *kāla-karma*—時と活動; *tamaḥ-ruddham*—そのような暗闇に包みこまれて; *punaḥ adhyagamat*—再びそれらを蘇らせて; *prabhuḥ*—自分の感覚の主人。

主の崇高な娯楽と活動ゆえに、そして主が姿を消したために、アルジュナは人格主神が残した教えを忘れてしまったように見える。しかしそうではない。アルジュナはふたたび感覚の主人になったのである。

要旨解説

条件づけられた魂は、永遠なる時の力によって、果報的活動のなかに包みこまれています。しかし至高主は、地上に化身となって現われても、カーラ、すなわち過去・現在・未来の影響は受けません。主の活動は永久に続き、その活動は主のアートマ・マーヤー、内的力の表われです。主のすべての娯楽も活動も精神的な質に満ちあふれていますが、俗人の目には物質的な活動と同じレベルの活動としか映りません。アルジュナと主はクルクシェートラの戦場で、敵軍がそうであったように、一心不乱に戦っていたのですが、主はみずからの化身としての使命を、そして永遠の友人であるアルジュナとの交流をはたしていたのです。ですから見た目には物質的に思えても、その活動は、アルジュナが超越的な境地にいたことを否定するものではありませんし、逆に、主みずから歌った主の歌という意識をよみがえらせたのです。この意識の復活は、主が『バガヴァッド・ギーター』（第18章・第65節）で次のように確証しています。

man-manā bhava mad-bhakto
mad-yājī mām namaskuru
mām evaiṣyasi satyaṁ te
pratijāne priyo 'si me

私たちはいつも主を思っていなくてはなりません。心は主をひとときも忘れてはならないのです。主の献愛者になって、主に敬意を捧げるのです。その精神で生きる人は、まちががなく、主の蓮華の御足という庇護を得て主の祝福を授かります。この永遠の真理を疑う余地はみじんもありません。アルジュナは主の親しい友でしたから、その秘密が彼に明らかにされたのです。

アルジュナは親族と戦う望みはいささかもありませんでしたが、主の使命をまっとうするために戦いました。いつも主の使命のためだけに行動し、だからこそ、主がこの世界から去ったあとも、たとえ『バガヴァッド・ギーター』の教えをすべて忘れたかのように見えても、じつは同じ超越的な境地にとどまっていたのです。ですから私たちは、日々の活動を主の使命と歩調を合わせるべきであり、そうすることで、ふるさとへ、神のもとに必ず帰っていくことができます。これこそ、人生の最高完成です。

第31節

विशोको ब्रह्मसम्पत्त्या सञ्चिन्नद्वैतसंशयः ।
लीनप्रकृतिनैर्गुण्यादत्स्वित्वादसम्भवः ॥ ३१ ॥

viśoko brahma-sampattyā
sañchinna-dvaita-saṁśayaḥ
līna-prakṛti-nairguṇyād
alīngatvād asambhavaḥ

viśokaḥ—死別から解放されて; brahma-sampattyā—精神的な美質をそなえることで; sañchinna—完全に切りはなされて; dvaita-saṁśayaḥ—相対性という疑いから; līna—～に溶け込んで; prakṛti—物質自然界; nairguṇyāt—超越性の中にいるために; alīngatvāt—物質の体がないために; asambhavaḥ—誕生と死から解放されて。

精神的な美質をそなえていたからこそ、アルジュナは二元性という疑いから完全に離れた境地にいた。こうして物質自然界の三様式から自由になり、超越的境地のなかにとどまった。も

はや、アルジュナが誕生と死の繰り返しに縛られる可能性はなかった。物質的な姿から解放されたからである。

要旨解説

二元性という疑いは、体を自分と思ひこむ誤解のために起こり、充分な知性のない人々がそのような考えをするものです。無知による愚かさでも最たるものは、「自分の体が自分」と見なすことにあります。体にかかわるものすべてを、無知のために、自分そのものとして受け取ってしまうのです。「私自身」とか「私のもの」という誤解ゆえの疑い——すなわち、「私の体」「私の親類」「私の所有物」「私の妻」「私の子ども」「私の富」「私の国」「私の社会」、そして何千何百という同じような幻の観念が、条件づけられた魂を混乱に落としおきます。『バガヴァッド・ギーター』の教えを吸収消化することで、私たちはまちがいがなくそのような困惑から解放されます。真の知識とは、自分自身を含むすべてが最高人格主神・ヴァースデーヴァ・主クリシュナによって作られたもの、という知識を指すからです。すべては主の力の部分として表わされました。力と力の源は同じですから、二元性という考え方は、完璧な知識を得ることですぐに消えていきます。アルジュナが『バガヴァッド・ギーター』の教えに身をゆだねた瞬間、物事に熟達しているからこそ、永遠の友である主クリシュナに関する物質的な観念を捨てることができました。そして、主の「教え」という形をとおして、あるいは主の姿、主の崇高な娯楽、主の質、そして主に関連するすべてをとおして、たとえ現世にあっても、主が自分の目のまえにいることを悟ることができたのです。親友である主クリシュナは、二元性とは無縁のさまざまなエネルギーをとおした超越性によって、アルジュナのすぐ目のまえにあり、時と空間に影響される肉体をもう一度得て主と交流する必要はない、とアルジュナは悟ることができました。絶対的な知識を得た人は、至高主について聞き、唱え、考えながら、現世であっても主といつも触れあうことができます。主について聞くことから始まる献愛奉仕をとおして、アドゥヴァヤ・ギャーナの主、すなわち絶対的な主を理解すれば、現世にいながらにして、主を見て、主の存在を感じるすることができます。主チャイタンニヤは言っています、主の聖なる名前を唱えさえすれば、純粋な意識という鏡に積もった埃をすぐにぬぐい去ることができ、その埃が取りのぞかれたとたん、物質的条件すべてから解放される、と。物質的な条件から解放される、とは、魂の解放を指しています。ですから、絶対的知識に立脚すると同時に、物質観念の生活はなくなり、あるいは間違った生活観念から抜け出すことができます。このようにして、純粋な魂の機能は精神的悟りのなかでよみがえります。生命体がこの現実的な悟りを得れば、徳・激情・無知という物質自然界の三様式の反動から解放されます。主の恩寵によ

って、純粋な献愛者はまたたくまに絶対的境地に高められますから、条件づけられた生活のなかにふたたび絡まっていく可能性はぜったいにありません。啓示経典で定められている献愛奉仕をとおして達成できる超越的視野をそなえるまでは、どのような状況にいても主の存在を感じられるようにはなれません。アルジュナは、クルクシェートラの戦いが始まるずっと以前からこの境地に到達していたのであり、主を見失ったかのように見えてましたが、すぐに『バガヴァッド・ギーター』の教えに身をゆだね、こうしてふたたび、自分本来の境地に立脚したのでした。これがヴィショーカ (viśoka) の境地、すなわち、すべての嘆きや不安から解放された境地です。

第32節

निशम्य भगवन्मार्गं संस्थां यदुकुलस्य च ।
स्वःपथाय मतिं चक्रे निभृतात्मा युधिष्ठिरः ॥ ३२ ॥

*niśamya bhagavan-mārgam
samsthām yadu-kulasya ca
svaḥ-pathāya matim cakre
nibhṛtātmā yudhiṣṭhirah*

niśamya—熟考している; *bhagavat*—主について; *mārgam*—主の出現と他界の方法; *samsthām*—終わり; *yadu-kulasya*—ヤドウ王の王家の; *ca*—もまた; *svaḥ*—主の住居; *pathāya*—の道で; *matim*—望む; *cakre*—集中した; *nibhṛta-ātmā*—孤独で一人の; *yudhiṣṭhirah*—ユディシュティラ王。

主クリシュナが自分の住居に帰っていったこと、ヤドウ家の地上での出現に終わりが来たことを聞いたマハーラージャ・ユディシュティラは、みずからもふるさとへ、そして神のもとに帰る決意をした。

要旨解説

マハーラージャ・ユディシュティラも、主が地球の人々の視界から消えてしまったことを聞いたあと、『バガヴァッド・ギーター』の教えに思いを没頭させました。そして主がどのように現われ、そして去っていったかについて深く思いを寄せました。この物質宇宙への主の降誕と他界の使命は、すべて主の至高の意志で行なわれています。生命体は自然界の法則で強制的

に現れたり消えたりするのですが、主は自分よりもある高い力によって現われたり消えたりすることを強いられているわけではありません。主が望むときはいつでも、ほかのどの場所においても、どこからでも現われることができます。主は太陽のような方です。太陽は独自に現われたり消えたりしますが、それでいて別の場所からいなくなるわけでもありません。朝、太陽がインド上空に現われても、同時に西半球から消えたわけでもありません。太陽は太陽系のどこにでも存在していますが、ある特定の場所で朝に現われ、また夕方には決まった時間に消えます。太陽でさえ私たちの時間の観念に縛られることなく動くのですから、太陽の創造者・支配者である至高主が時間の制約を受けないのは当然です。ですから『バガヴァッド・ギーター』では、主の想像を絶するエネルギーによる超越的な降誕と消滅を正しく理解する者は、誕生と死の法則から解放され、ヴァイクンタ惑星ある永遠な精神界に入っていく、と言われていています。そのように解放された人々はそこで、誕生・死・老年・病気の苦しみを味わうことなく永遠に生きることができます。精神界には老年も病気もありませんから、主も、そして主に超越的な愛情奉仕をしている魂たちは永遠に若々しいのです。死もなければ、誕生もないのですから。主の降誕と他界を正しく理解しさえすれば、永遠なる生活という完璧な境地に到達できる——これが結論です。ですから、マハーラージャ・ユディシュティラも、神のもとに帰っていくことを思いはじめました。主は地球に、あるいはこの物質界のどこかに、主と永遠に住む交流者とともに現われ、そして主の崇高な娯楽を支えていたヤドゥ家の人々も主の永遠な交流者であるように、マハーラージャ・ユディシュティラ、その兄弟や母親たちも、同じ永遠な交流者です。主と主の永遠な交流者の降誕と他界は超越的ですから、私たちは、外見上の現われと消滅に惑われてはなりません。

第 3 3 節

पृथाप्यनुश्रुत्य धनञ्जयोदितं
 नाशं यदूनां भगवद्गतिं च ताम् ।
 एकान्तभक्त्या भगवत्यधोक्षजे
 निवेशितात्मोपरराम संसृतेः ॥ ३३ ॥

*pr̥thāpy anuśrutya dhanañjayoditam
 nāśaṁ yadūnāṁ bhagavad-gatiṁ ca tām
 ekānta-bhaktyā bhagavatya adhoḥkṣaje
 niveśitātmopararāma saṁsṛteḥ*

pr̥thā—クンティー; *api*—もまた; *anuśrūtya*—人から聞いている; *dhanañjaya*—アルジュナ; *uditam*—～によって語られた; *nāśam*—終焉; *yadūnām*—ヤドゥ家の; *bhagavat*—人格主神の; *gatim*—消失; *ca*—もまた; *tām*—それらすべて; *eka-anta*—無垢な; *bhaktyā*—献愛奉仕; *bhagavati*—至高主、シュリー・クリシュナへの; *adhokṣaje*—超越性; *niveśita-ātmā*—完全に集中して; *upararāma*—～から解放された; *saṁsr̥teḥ*—物質存在。

クンティーは、アルジュナが話したヤドゥ家の終焉と主クリシュナの他界について聞いたあと、超越的な人格主神への献愛奉仕に没頭し、やがて物質存在の生き方から解放された。

要旨解説

太陽が沈んだからといって、太陽が消滅してしまったわけではありません。私たちの視界から消えただけのことです。同じように、ある惑星や宇宙で主の使命が終わるのは、私たちの視界から姿を消したということです。ヤドゥ家の終焉にしても、それでヤドゥ家がすっかりなくなってしまうわけではありません。主とともに、私たちの目に見えなくなった、というだけのことです。マハーラージャ・ユディシュティラがふるさとに、神のもとに帰ることを決意したように、クンティーも同じように心に決め、主への超越的な献愛奉仕に没頭するようになりました。献愛奉仕は、現在の体を終えたあとに神のもとに帰るパスポートを保証してくれます。主への献愛奉仕の始まりは、現在の体を精神化させる始まりであり、こうして主の純真無垢な献愛者は、いま持っている体との物質的な接触をすべて捨てさります。主の住居は、無信心の、あるいは無知な人々が考えているような神話ではなく、またスプートニクや宇宙カプセルのような物質的な手段で行ける世界ではありません。それでも、いまの体を出たあとに必ず行けますし、そのためには献愛奉仕を修練して神のもとに帰る準備をしなくてはなりません。それが神のもとに戻るパスポートを保証してくれるのであり、クンティーもその方法に従いました。

第34節

ययाहरद् भुवो भारं तां तनुं विजहावजः ।
कण्टकं कण्टकेनेव द्वयं चापीशितुः समम् ॥ ३४ ॥

yayāharad bhuvo bhāraṁ
tām tanuṁ vijahāv ajaḥ
kaṅṭakam kaṅṭakeneva

dvayam cāpīsituḥ samam

yayā—～によるもの; *aharat*—取りさった; *bhuvah*—世界の; *bhāram*—重荷; *tām*—それ; *tanum*—体; *vijahau*—放棄した; *ajah*—生まれぬ者; *kaṅṭakam*—棘(とげ); *kaṅṭakena*—棘によって; *iva*—そのように; *dvayam*—両方; *ca*—もまた; *api*—～ではあるが; *iṣituḥ*—支配している; *samam*—等しい。

至上の、そして生まれることのない主シュリー・クリシュナは、ヤドゥ王家全員が体を放棄するよう仕向け、こうして世界の負担を緩和させたのである。このような行動は、支配者に同じことで、棘を使って棘を抜くようなものである。

要旨解説

シュリーラ・ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティー・タークラは、「ナイミシャラニヤでスータ・ゴースヴァーミーから『シュリーマド・バーガヴァタム』を聞いていたシャウナカや他のリシたちは、ヤドゥ家の人々が陶酔状態という狂気のなかで死んでいったことを聞いて胸を痛めた」と表現しています。彼らのこの心の苦痛を癒すため、スータ・ゴースヴァーミーが確証しています、ヤドゥ王家の人々が自分たちの体を放棄させるよう仕向けたのは主であり、そうすることで世界の負担を取りさった、と。主と主の永遠の交流者が地上に降誕するのは、世界の重荷をなくす任務を持つ管理者である半神たちを助けるためです。ですから主は秘奥な半神たちを必要としますし、彼らをヤドゥ家に誕生させ、主の壮大な使命をおして主に仕えさせるのです。その使命が終われば、半神たちは主の意志によって、陶酔状態という狂気のなかで互いに戦って物質の体を捨てます。半神はソーマ・ラサという飲料をよく飲んでいますが、酒を飲んだり酔っぱらったりするのはふだんからしていることです。ときに彼らは、陶酔状態に陥って問題に巻き込まれることがあります。あるとき、クヴェーラの息子たちは酔って醜態をさらし、ナーラダの怒りをかうことになりましたが、最後には、主シュリー・クリシュナの恩寵で自分たち本来の体を取りもどすことができました。この話は本書の第10編で読むことができます。至高主にはアスラも半神も同じですが、半神たちは主に従順でもアスラたちはそうではありません。ですから、棘を使って別の棘を抜く、という例はじつに的を射ています。主の足に刺さった1本の棘は、もちろん主にはやっかいなことではあったのですが、混乱させる要素を取りのぞく別の棘は、主に確かな奉仕をすることができます。このように、どの生命体も主の部分体ではあるのですが、主にとってやっかいな棘になる者をアスラと呼び、主への自発的な召使いをデーヴァター、すなわち半神といいます。デーヴァターとアスラたち

は物質界でいつも争っており、デーヴァターはいつも主によってアスラの手から救われています。どちらも主の支配下にあるのです。世界はこの2種類の生命体で満ちており、主の使命はいつもデーヴァターたちを守り、アスラたちを破滅させることにあります。世界のどこかでそのような必要性が生じるときにはいつでもそうしますし、それはまたどちらにとってもいいことなのです。

第35節

यथा मत्स्यादिरूपाणि धत्ते जह्याद् यथा नटः ।
भूभारः क्षपितो येन जहौ तच्च कलेवरम् ॥ ३५ ॥

yathā matsyādi-rūpāṇi
dhatte jahyād yathā naṭaḥ
bhū-bhāraḥ kṣapito yena
jahau tac ca kalevaram

yathā—〜と同じ; *matsya-ādi*—魚などの化身; *rūpāṇi*—姿; *dhatte*—永遠に受け入れる; *jahyāt*—見たところ放棄された; *yathā*—まさに〜のように; *naṭaḥ*—魔術師; *bhū-bhāraḥ*—世界の負担; *kṣapitaḥ*—救った; *yena*—〜であるものによって; *jahau*—行かせる; *tac*—それ; *ca*—もまた; *kalevaram*—体。

至高主は、地球の過重の重荷を軽くするために表わされたその体を捨てた。あたかも奇術師のように、一つの体を捨てて次の体を受け入れられたのである。魚の化身、その他数々の化身のように。

要旨解説

至高主・人格主神は、人格や姿のない存在ではありません。主の体は主そのものであり、そのために永遠性、知識、至福の権化として知られています。『ブリハドゥ・ヴァイシュナヴァ・タントラ』には、主クリシュナの姿が物質エネルギーで作られていると考える者は、ぜったいに排斥しなくてはならない、と明記されています。さらに、偶然であってもそのような異端者の顔を見たら、服を着たまま川に飛びこんで身を清めなくてはならない、とも書かれています。主はアムリタ (*amṛta*) 「死ぬことのない者」と呼ばれていますが、それは主が物質の体を持っていないことによるものです。この事実を知っている人の目には、主が死ぬ、あるいは主が

体を終えるのは、奇術師の演技のように映ります。奇術師は、自分を切り刻んだり、燃やして灰にしたり、催眠術で無意識になったりするのですが、それは演技にすぎません。じっさいは、奇術で燃えてしまったり切り刻まれたり、死んだり無意識になったりするわけではありません。同じように、主には多様性に満ちた無限で永遠の姿があり、それはこの宇宙でしめされ、そして魚の化身がその一つです。宇宙は無数にありますから、その魚の化身という姿は、どこかで途切れることなく表わされているのです。この節には *dhatte* (ダハッター) という特別の言葉が使われており、意味は「永遠に受けいられる」で、*dhivā* (デヒトウヴァー) 「一時的に受けいられる」という意味の言葉は使われていません。主が魚の化身を作った、というわけではないという点が大切なのです。主はその姿を永遠に持っている、またその化身が現われたり消えたりすることには特別の意味がある、ということです。『バガヴァッド・ギーター』(第7章・第24-25節)で主が言います、「非人格論者は、わたしは姿を持っていない、姿のない存在であり、なにかのために姿を受けいれ、それをいま表わしている、と考えている。しかしそう思う推論者たちにはじつは鋭い知性が欠けているのだ。ヴェーダ経典の優れた学者でとおっているかもしれないが、ほんとうは、人智を絶するわたしのエネルギーや、わたしの人物という永遠の姿についてなにも知らない。それは、わたしは神秘なるカーテンを使って、非献愛者にわたしはみずからを見せない力を行使しているからである。だからこそ、知性のない愚か者たちは、決して滅びることも生まれることもない永遠の姿のことを知らないのである」と。『パドゥマ・プラーナ』では、主に嫉妬し、主に怒りをおぼえている者たちは、主の永遠で真の姿を知る資格はない、と言われていました。『シュリーマド・バーガヴァタム』でも、主は、あたかも雷のようにレスラーたちのまえに現われた、と言われていました。シシュパーラは主に殺されたとき、ブラフマジョーティのまばゆさゆえに主をクリシュナとして見るできませんでした。ですから、カムサに遣わされたレスラーたちにとって雷としての主の一時的な現われは、あるいはシシュパーラに表わされたまばゆい主の輝きは、主によって放棄されましたが、魔術師のような主は、永遠に存在し、どのような状況でも打ち破られることはありません。そのような姿はアスラだけにしめされる一時的なものであり、その表われが引きこめられると、アスラたちは「もういなくなった」と考えます。それは愚かな聴衆が、魔術師が燃えて灰になったりこなごなになったりする、と考えるようなものです。結論として言えるのは、主は物質的な体を持たない、だから決して殺されないし、みずからの超越的な体を変えることはない、という点につきます。

第36節

यदा मुकुन्दो भगवानिमां महीं
जहौ स्वतन्वा श्रवणीयसत्कथः ।
तदाहरेवाप्रतिबुद्धचेतसा-
मभद्रहेतुः कलिरन्ववर्तत ॥ ३६ ॥

*yadā mukundo bhagavān imām mahīm
jahau sva-tanvā śravaṇīya-sat-kathaḥ
tadāhar evāpratibuddha-cetasām
abhadra-hetuḥ kalir anvavartata*

yadā—～の時; *mukundaḥ*—主クリシュナ; *bhagavān*—人格主神; *imām*—この; *mahīm*—地球; *jahau*—去った; *sva-tanvā*—主の本来の姿で; *śravaṇīya-sat-kathaḥ*—主について聞くことは十分な価値がある; *tadā*—その時; *ahaḥ eva*—その日から; *apratī-buddha-cetasām*—心が十分に発達していない者達の; *abhadra-hetuḥ*—すべての悲運の原因となる; *kalīḥ anvavartata*—完全に表わされたカリ。

人格主神、主クリシュナが自分本来の姿でこの地球という惑星を去ったその瞬間から、それまでかすかに姿を見せていたカリは、貧弱な知識しか持ち合わせていない者たちに不吉な状態を作り出すために、完全にその姿を表わした。

要旨解説

カリの影響は、神の意識を完全に高めていない者たちだけに強く及ぼされます。カリの影響は、人格主神の至上の世話に身をゆだねることで中和されます。カリの時代はクルクシェートラの戦いが終わった直後に始まりましたが、主がまだいたためにその影響は完全に現われていたわけではありません。しかし主はみずからの超越的な体とともに地球を去り、その瞬間、アルジュナがドウヴァーラーカーから帰還するまえにマハーラージャ・ユディシュティラが前触れを見たカリ・ユガの兆候は現われ、マハーラージャ・ユディシュティラは、主が地球から離れたことを正しく推測しました。すでに説明したように、主は、太陽が私たちの視界から消えていくように、私たちの視界から消えていったのです。

第37節

युधिष्ठिरस्तत्परिसर्पणं बुधः

पुरे च राष्ट्रके च गृहे तथात्मनि ।
विभाव्य लोभानृतजिह्वहिंसना-
द्यधर्मचक्रं गमनाय पर्यधात् ॥ ३७ ॥

*yudhiṣṭhīras tat parisarpaṇam budhaḥ
pure ca rāṣṭre ca gr̥he tathātmani
vibhāvya lobhānṛta-jihva-hiṁsanādy-
adharmā-cakram gamanāya paryadhāt*

yudhiṣṭhīrah—マハーラージャ・ユディシュティラ; *tat*—それ; *parisarpaṇam*—拡大; *budhaḥ*—すっかり経験して; *pure*—都市において; *ca*—もまた; *rāṣṭre*—国において; *ca*—そして; *gr̥he*—家庭で; *tathā*—もまた; *ātmani*—本人が; *vibhāvya*—見ている; *lobha*—強欲; *anṛta*—不真実; *jihva*—外交取引; *himsana-ādi*—暴力、嫉妬; *adharmā*—非宗教; *cakram*—悪循環; *gamanāya*—他界のために; *paryadhāt*—適切な服装に身を包んで。

マハーラージャ・ユディシュティラは十分な知性をそなえていた人物だったため、強欲、欺瞞、詐欺、暴力が都市・国・家庭・個人のなかに高まる特質を持つカリ時代の影響を察した。だからこそ賢いかれは、ふさわしい衣服に身を包んで家を出る準備を整えたのである。

要旨解説

現在の時代は、カリという特定の質の影響を受けます。クルクシェートラの戦い以降、すなわち約5000年まえにカリ時代の影響が現われはじめ、そして権威ある経典を学べば、カリ時代はさらに427,000年存続することがわかります。カリ・ユガの兆候は、この節で述べられているように、強欲、欺瞞、駆け引き、詐欺、縁者びいき、暴力など、それに類する忌まわしい特徴があり、またそれはすでに世に蔓延しており、破滅の日が来るまでにカリの影響がこれらどれほど強くなり、なにが起こるのかだれも想像できません。私たちは、カリ時代の影響が無神論の、いわゆる文化人に起こることを知っています。主に守られている人々にとって、この恐ろしい時代は恐るるにたりません。マハーラージャ・ユディシュティラは主の偉大な献愛者であり、カリ時代を恐れる必要はどこにもありませんでしたが、これまでの活動的な家庭生活から離れ、ふるさとへ、神のもとへ帰る準備をはじめました。パーンダヴァ兄弟は主の永遠の仲間ですから、主と共にいること以外に興味はありません。さらにマハーラージャ・ユディシュティラは理想的な王として、人々に模範をしめすためにすべてを放棄したいと考えました。

家庭をまかせられる若い人がいるのであれば、精神的悟りを高めるためにすぐに家庭生活を離れなくてはなりません。ヤマラージャの決定で引きずり出されるまで、家庭生活という暗い井戸のなかで腐りつづけてはなりません。現代の政治家たちもマハーラージャ・ユディシュティラの生涯から学び、みずから進んで活動的な生活から身を引く、若い世代の人々のために席を譲るべきです。また、引退した老人もユディシュティラ王から学び、この世から引きずり出されて死に直面するまえに、精神的悟りのために家を出なくてはなりません。

第38節

स्वराट् पौत्रं विनयिनमात्मनः सुसमं गुणैः ।
तोयनीव्याः पतिं भूमेरभ्यषिच्चद्राह्वये ॥ ३८ ॥

*sva-rāṭ pautram vinayinam
ātmanah susamam guṇaiḥ
toya-nīvyāḥ patim bhūmer
abhyaṣiñcad gajāhvaye*

sva-rāṭ—皇帝; *pautram*—孫に; *vinayinam*—適切に訓練された; *ātmanah*—彼自身; *su-samam*—あらゆる面で等しい; *guṇaiḥ*—質によって; *toya-nīvyāḥ*—海に接する; *patim*—主人; *bhūmeḥ*—その土地の; *abhyaṣiñcat*—王座に就けて; *gajāhvaye*—ハスティナープラの都市に。

そのあとかれはハスティナープラの都で、皇帝として、また海と接する国家全土の主人となるための訓練をうけ、またその質を充分になえた孫を王位に就けた。

要旨解説

海を境界線とした国土はすべてハスティナープラの王の従属化にありました。マハーラージャ・ユディシュティラは、自分と等しく資格のある孫のマハーラージャ・パリークシットを、王の市民に対する義務に関連して、そして国が統治できるよう訓練しました。こうしてパリークシットは、マハーラージャ・ユディシュティラが神のもとに帰っていくまえに王の座につきました。マハーラージャ・パリークシットに関連して、この節で使われている *vinayinam* (ヴィナイナム) は重要な意味があります。なぜハスティナープラの王は、少なくともマハーラージャ・パリークシットの時代まで、世界の皇帝とされていたのでしょうか。唯一の理由は、皇帝の巧みな統治のおかげで世界の人々が幸せに暮らしていたからです。市民の幸福は、穀物、くだも

の、ミルク、薬草、貴重な宝石、ミネラルなど、生活に不可欠な自然産物が豊富に支給されていたからです。だれもが体の痛みや心の不安さえなく、自然現象やほかの生物による混乱に苦しめられることもありませんでした。みんながあらゆる面で幸せに暮らしていたからこそ、たとえ国王同士の政治的な理由や主権をめぐる戦いはあっても、人々のなかに怒りの感情はまったくありませんでした。だれもが人生最高の目標を達成できるよう訓練を受け、だからこそ、つまらないことで争わない十分な知識を悟っていました。カリ時代の影響は、国王と市民双方の優れた気質にも徐々に浸透し、そのために支配する側とされる側のあいだに緊張が高まっています。しかし、両者にそのような不均衡が生じる現代にでさえ、精神的な恩恵を得て、神の意識を高めることはできます。それがこの時代の特典でもあります。

第39節

मथुरायां तथा वज्रं शूरसेनपतिं ततः ।
प्राजापत्यां निरूप्येष्टिमग्नीनिषिबदीश्वरः ॥ ३९ ॥

*mathurāyām tathā vajram
śūrasena-patiṁ tataḥ
prājāpatyām nirūpyeṣṭim
agnīn apibad īśvaraḥ*

mathurāyām—マトウラーで; *tathā*—もまた; *vajram*—ヴァジラ; *śūrasena-patiṁ*—シューラセーナの王; *tataḥ*—その後; *prājāpatyām*—プラージャーパテヤの儀式; *nirūpya*—執行して; *iṣṭim*—目標; *agnīn*—火; *apibat*—自分の内に置いた; *īśvaraḥ*—有能な。

次に、ア Niludda (主クリシュナの孫) の子であるヴァジラをシューラセーナの国王に任命した。そのあとマハーラージャ・ユディシュティラはプラージャーパテヤの儀式をし、みずから世帯者生活を終えるために火のなかに入れた。

要旨解説

マハーラージャ・ユディシュティラは、マハーラージャ・パリークシットをハスティナープルの王座に就けたあと、放棄生活に入りました。気質と活動にもとづく4つの地位と階級、すなわちヴァルナーシュラマ・ダルマは、人間生活の始まりであり、マハーラージャ・ユディシュティラは人間の活動体系を守る者として、活動的な生活から離れてサンニャシーとなり、

訓練を受けた王子、マハーラージャ・パリークシットに管理責任を譲りました。科学的なシステムであるヴァルナーシュラマ・ダルマは、人間生活を4つの職務と4つの生活階級に分けています。4つの生活階級、つまりブラフマチャーリー、グリハスタ、ヴァーナプラスタ、サンニャシーは、職務とは関係なくだれでも従わなくてはなりません。現代政治家は、かなりの年配になっても活動的な生活から離れようとしませんが、ユディシュティラ・マハーラージャは、理想的な王として、自発的に活動的な管理者としての生活を離れ、次の段階の生活にそなえました。だれであっても、人生の最高完成を達成するために、人生幕引きのまえ、たとえば死を迎える15年、あるいは20年まえには、主への献愛奉仕に完全に打ちこまなくてはなりません。全生涯を物質的な楽しみや果報的活動のために費やしてしまうのはほんとうに愚かなことです。心が物質的な楽しみを求めて果報的活動に没頭していれば、条件づけられた生活や物質的束縛から出られる可能性はまったくないからです。ふるさとに、神の元に帰るといふ人生の最高完成に到達する至上の仕事を見捨ててしまう自殺行為は避けなくてはなりません。

第40節

विमृज्य तत्र तत् सर्वं दुकूलवल्यादिकम् ।
निर्ममो निरहङ्कारः सञ्चिन्नाशेषबन्धनः ॥ ४० ॥

*visṛjya tatra tat sarvaṁ
dukūla-valayādikam
nirmamo nirahaṅkāraḥ
sañchinnāśeṣa-bandhanaḥ*

visṛjya—放棄している; *tatra*—それらすべて; *tat*—それ; *sarvam*—すべて; *dukūla*—ベルト; *valaya-ādikam*—そして飾り物; *nirmamaḥ*—無関心; *nirahaṅkāraḥ*—無執着; *sañchinna*—完全に断ち切って; *āśeṣa-bandhanaḥ*—無限の執着。

マハーラージャ・ユディシュティラはすぐに、これまで着ていた服、ベルト、王にふさわしい装飾品をすべて捨て、なにごとにも無関心・無執着になった。

要旨解説

物質的な穢れから清められることが、主の交流者の一人になる必要な資格です。清められなければ、主の交流者になったり神のもとに帰ったりすることはできません。ですからマハーラ

ージャ・ユディシュティラは、精神的な浄化のために、王としての衣服を脱ぎ捨てて王族の富を放棄しました。カシャーヤ (kaṣāya)、つまりサンニャーシーが着るサフラン色の腰巻きは、目を惹きつける物質的な衣服とは無関係であることを指しており、こうしてかれは、これかの生涯にふさわしい衣服に着替えました。王国や家族に無関心になり、物質的な穢れや物質的な身分から解放されました。ほとんどの人はさまざまな身分——家族、社会、国、職業、富、地位など——に執着しています。その執着は、まだ物質的な穢れに囚われているということです。現代の、いわゆる人類の指導者と言われる人々は国家中心的な意識に囚われていますが、その偽りの意識も、物質的に穢れた魂の別のこだわりだとうことを知りません。神のもとに帰る資格を得るまえに、そのようなこだわりを捨てなくてはならないのです。愚かな人たちは、国へのこだわりを持ちつつ死んでいく人たちを崇めるものですが、この節にはマハーラージャ・ユディシュティラという国に囚われた意識を捨てて世界を去ろうとする国王の例を見ることができるのであり、人格主神シュリー・ラーマと同じほどの敬意をこめて思いだされています。世界の人々はこの敬虔な王に守られていたからあらゆる面で幸せでしたし、そして、それほど偉大な皇帝だったからこそ世界を巧みに治めることができたのです。

第 4 1 節

वाचं जुहाव मनसि तत्प्राण इतरे च तम् ।
मृत्यावपानं सोत्सर्गं तं पञ्चत्वे ह्यजोहवीत् ॥ ४१ ॥

vācam̐ juhāva manasi
tat prāṇa itare ca tam
mṛtyāv apānam̐ sotsargam̐
tam̐ pañcatve hy ajohavīt

vācam—話すこと; juhāva—放棄して; manasi—心の中に tat prāṇe—心を呼吸の中に; itare ca—他の感覚も; tam—その中に; mṛtyau—死の中に; apānam—呼吸; sa-utsargam—完全に専念して; tam—それ; pañcatve—5要素で作られた肉体の中に; hi—確かに; ajohavīt—それを融合させた。

そしてかれは、すべての感覚器官を心のなかに融合させ、さらに心を命へ、命を呼吸へ、自分の全存在を5要素の権化に、体を死へ融合させた。そしてさらに、純粋な自己として、物質的生活観念から解放された。

要旨解説

マハーラージャ・ユディシュティラは、弟のように、意識を集中させ、しだいにあらゆる物質の束縛から自由になっていきました。最初に感覚のすべての動きに意識を集中し、それらを心に融合させました。これは、心を主への超越的な奉仕に向けたということです。かれは祈りました、「すべての活動は物質的感覚の動・反動にもとづいて心によって為されるものだから、また自分は神のもとに帰るつもりなのだから、心が物質的な活動を終わらせ、主への超越的な奉仕に向くように」、と。もう物質的なことをする必要がなかったのです。じっさい、心は永遠な魂の反映ですから、その動きを止めることはできません。しかし、活動の質を物質的な状態から主への超越的な奉仕に方向転換させることはできます。心が持つ物質的な傾向は、生气という穢れを洗い清めるとき変化し、そのことでその心を、誕生と死の繰りかえしという穢れから解放させ、そして純粋な精神的意識のなかに位置させることができます。すべては、肉体という一時的な権化によって表わされますが、もし心が主への超越的愛情奉仕によって純粋になれば、そして主への蓮華の御足への奉仕に絶えず使われているのであれば、死んだあとに、心が別の肉体を作りだすことはありません。物質的な穢れへの没頭から解放されるのです。純粋な魂は、こうしてふるさとへ、神のもとへ帰っていきます。

第42節

त्रित्वे हुत्वा च पञ्चत्वं तच्चैकत्वेऽजुहोन्मुनिः ।
सर्वमात्मन्यजुहवीद्ब्रह्मण्यात्मानमव्यये ॥ ४२ ॥

*tritve hutvā ca pañcatvaṁ
tac caikatve 'juhon muniḥ
sarvam ātmany ajuhaviḍ
brahmaṇy ātmānam avyaye*

tritve—3つの質の中に; *hutvā*—捧げて; *ca*—もまた; *pañcatvaṁ*—5要素; *tat*—それ; *ca*—もまた; *ekatve*—1つの無知の中に; *ajuhot*—融合させて; *muniḥ*—思慮深い者; *sarvam*—総体; *ātmani*—魂の中に; *ajuhaviḍ*—固定して; *brahmaṇi*—精神魂の中に; *ātmānam*—その魂; *avyaye*—無尽蔵の者の中に。

こうしてかれは、5要素でできた濃密な体を物質自然界の三様式のなかに捨て去り、それら

を1つの無知のなかに溶け込ませ、次にその無知を、どのような状況においても無尽蔵なるブラフマンのなかに融合させた。

要旨解説

物質界に表わされたものはすべて、マハトウ・タットウヴァ・アヴァクタ (*mahat-tattva-avyakta*) の産物であり、私たちの目に見えるものは、その多様な物質の産物が並び替えられた表われにすぎません。しかし、生命体は物質の産物ではありません。生命体が偽りの物欲の世界に入ってしまうのは、主の永遠な召使いという永遠な気質を忘れ、自分は物質自然界の主人だと思いこんでいるからです。このように、物質エネルギーから作られる付随的発生物こそ、私たちの心が物質に影響されてしまう主要な原因です。5要素の濃密な体はこうして作られました。マハーラージャ・ユディシュティラは活動を方向転換させ、体の5要素を物質自然の三様式と融合させました。肉体に関する良い、悪い、どちらでもないという質的違いはなくなり、ふたたび質的表われが純粋な生命体の偽りの感覚から作りだされる物質エネルギーのなかに融合します。こうして、精神界とくにゴーローカ・ヴリンダーヴァナにある無数の一惑星に入って、至高主・人格主神の交流者になりたいのであれば、「私は物質エネルギーとは違う存在である」といつも自覚していなくてはなりません。自分は物質エネルギーとは無関係で、純粋な精神魂・ブラフマンであること、そして至高のブラフマン (パラメーシュヴァラ) と質的に同じであることを悟る必要があります。マハーラージャ・ユディシュティラは王国をパリークシットとヴァジラに分け与えたあと、自分は世界の皇帝でもクル家の筆頭者でもない、と考えるようになっていました。物質的なしならみからの解放、そして濃密・希薄な物質的包囲という束縛からの解放は、物質界にいても主の召使いとしての自由な活動を可能にしてくれます。これがジーヴァン・ムクタ (*jīvan-mukta*)、すなわち物質界の只中にいても解放されている境地です。自分はブラフマンであると考えただけではなく、ブラフマンとして行動しなくてはならないのです。自分はブラフマンである、とだけ考えるのが非人格論者です。ブラフマンとして行動する人が純粋な献愛者です。

第43節

चीरवासा निराहारो बद्धवाङ् मुक्तमूर्धजः ।
दर्शयन्नात्मनो रूपं जडोन्मत्तपिशाचवत् ।
अनवेक्षमाणो निरगादशृण्वन् बधिरो यथा ॥ ४३ ॥

cīra-vāsā nirāhāro
baddha-vāñ mukta-mūrdhajaḥ
darśayann ātmano rūpaṃ
jaḍonmatta-piśācavat
anavekṣamāṇo niragād
aśṛṇvan badhiro yathā

cīra-vāsāḥ—破れた服を着た; nirāhāraḥ—固形食をすべて食べなくなった; baddha-vāk—話すことをやめた; mukta-mūrdhajaḥ—結んでいない髪の毛; darśayan—示し始めた; ātmanaḥ—彼自身の; rūpaṃ—体の風貌; jaḍa—鈍い; unmatta—狂った; piśāca-vat—まるで浮浪者のように; anavekṣamāṇaḥ—～を待つことなく; niragāt—位置された; aśṛṇvan—聞くことのない; badhiraḥ—まるで聾者(ろうしゃ)のように; yathā—あたかも～のように。

そのあとマハーラージャ・ユディシュティラは、破れ服に身をつつみ、固形食はいっさい食べず、口もきかず、ざんばら髪になった。このような風采のため、かれは浮浪者か無職の狂人に見えた。そして聾者のように、なにも聞かなくなった。

要旨解説

こうして、外界の物事からいっさいみずからを切り離れたマハーラージャ・ユディシュティラは、皇帝としての生活や家族の威信から遮断し、自分の意図を貫くために、自分をあたかも鈍重で狂った浮浪者のように見せかけ、俗世界のことについていっさい口を開かなくなりました。これまでなにかと助けてくれていた兄弟たちに頼ることもなくなります。すべてからいっさい離れてしまうこの境地は、恐れのない純粋な境地とも言われています。

第 4 4 節

उदीचीं प्रविवेशाशां गतपूर्वां महात्मभिः ।
हृदि ब्रह्म परं ध्यायन्नावर्तेत यतो गतः ॥ ४४ ॥

udīcīm praviveśāśām
gata-pūrvām mahātmabhiḥ
hṛdi brahma paraṃ dhyāyan
nāvarteta yato gataḥ

udicim—北側; praviveśa-āsām—そこに入りたい者達; gata-pūrvām—彼の祖先に受けいれられた道; mahā-ātmabhiḥ—寛大な者によって; hṛdi—心の中で; brahma—至高者; param—主神; dhyaṅyan—～についていつも考えている; na āvarteta—彼の日々を過ごした; yataḥ—～する所はどこでも; gataḥ—行った。

そして北に向かって発ち、最高人格主神への思いだけに完全に専念するために、自分の祖先や偉人が辿ったその道を進んでいった。そして、どこへ行っても、その思いを胸に生きつづけた。

要旨解説

この節からは、マハーラージャ・ユディシュティラは自分の祖先や主の偉大な献愛者たちが辿った足跡に従ったことがわかります。これまで何度も話しあってきたことですが、ヴァルナーシュラマ・ダルマのシステムは、世界の住人たち、とくにアーリャーヴァルタの領域に住む人々が厳格に従ってきたように、人生のある時期になれば家族とのつながりすべてから身を引くという重要性を強調しています。訓練も教育もその考えにもとづいて授けられるもので、マハーラージャ・ユディシュティラのように高潔な人物は、自己の悟りと神への帰還のために家族との関係をすべて断ち切らなくてはなりません。国王や高潔な人物は、生涯を閉じるまで家族生活を続けることはありません。死ぬまで家族に縛られた生活は自殺行為に等しく、人間生活の完成という重要性に反するものだからです。家族にまつわる足かせから解放され、主クリシュナへの献愛奉仕に100%専念するために、このシステムは、権威に支えられた道だからこそ、だれにでもいつでも勧められています。主は『バガヴァッド・ギーター』(第18章・第62節)で、主の献愛者になるべきである、すくなくとも人生最期のときまでに、と説いています。マハーラージャ・ユディシュティラのように、主の誠実な魂は、自分の恩恵のためにも、主の教えに従わなくてはなりません。

この節にある *brahma param* (ブラフマ パランム) という特別の言葉は主シュリー・クリシュナを指しています。これはアルジュナが『バガヴァッド・ギーター』(第10章・第13節)で、アルジュナが、アシタ、デーヴァラ、ナーラダ、ヴァーサという偉大な権威者と裏づけて同じ言葉を引用しています。かくて、マハーラージャ・ユディシュティラは、北に向かって旅立とうとするとき、自分の祖先たち、さらには過去の偉大な献愛者の足跡に従い、たえず心のなかで主シュリー・クリシュナを思いつづけていたのです。

第45節

सर्वे तमनुनिर्जग्मुर्भ्रातरः कृतनिश्चयाः ।
कलिनाधर्ममित्रेण दृष्ट्वा स्पृष्ट्वाः प्रजा भुवि ॥ ४५ ॥

*sarve tam anunirjagmur
bhrātaraḥ kṛta-niścayāḥ
kalinādharma-mitreṇa
dṛṣṭvā sprṣṭāḥ prajā bhuvī*

sarve—弟達全員; *tam*—彼に; *anunirjagmuḥ*—兄に従って家を去った; *bhrātaraḥ*—兄弟達; *kṛta-niścayāḥ*—明確に; *kalinā*—カリ時代によって; *adharmā*—無宗教の原則; *mitreṇa*—友人によって; *dṛṣṭvā*—見ている; *sprṣṭāḥ*—襲われて; *prajāḥ*—全市民; *bhuvī*—地上の。

マハーラージャ・ユディシュティラの弟たちは、カリ時代がすでに世界中に達し、国中の市民たちが無宗教の行ないに影響されている様を見た。だからこそかれらも、兄の進んだ足跡に従う決心をしたのである。

要旨解説

マハーラージャ・ユディシュティラの弟たちはすでに偉大な皇帝の忠実な従者として生き、人生の窮極目標を知るための十分な訓練を受けていました。ですから、主シュリー・クリシュナに献愛奉仕をすることで、兄に従う決心をしました。サナータナ・ダルマの原則によると、人生の半分を過ぎたら家族生活から離れ、自己を悟るために生きなくてはなりません。しかし、それをどのように実行すればいいのか定かではありません。引退した人が、生涯最期の日々をどのように過ごしたらいいのか戸惑うことがあります。しかし、ここにパーンダヴァ兄弟のような権威者の覚悟を見ることができます。かれらは、主シュリー・クリシュナ、最高人格主神への献愛奉仕を好意的に修練してきました。スヴァーミー・シュリーダラによると、アルタ、カーマ、モークシャ、あるいは果報的活動、哲学的思索、そして救済を旨とする人々が、どれも人生の窮極目標とは言えません。なにが目標か知らない人々が修練するものです。窮極目標はすでに『バガヴァッド・ギーター』(第18章・第64節)で、主自身がしめしており、パーンダヴァ兄弟はためらわずにその教えに従う知性をそなえていた人々でした。

第46節

ते साधुकृतसर्वार्था ज्ञात्वात्यन्तिकमात्मनः ।
मनसा धारयामासुर्वैकुण्ठचरणाम्बुजम् ॥ ४६ ॥

*te sādhu-kṛta-sarvārthā
jñātvātyantikam ātmanaḥ
manasā dhārayām āsur
vaikuṅṭha-caraṇāmbujam*

te—かれら全員; sādhu-kṛta—聖者にふさわしい行ないすべてを實踐して; sarva-arthāḥ—価値あるものすべてを含む物事; jñātvā—それをよく知っている; ātyantikam—窮極; ātmanaḥ—生命体の; manasā—心の中で; dhārayām āsuḥ—維持して; vaikuṅṭha—精神界の主; caraṇa-ambujam—蓮華の御足。

かれらはこれまで宗教原則をすべて實踐していたため、主シュリー・クリシュナの蓮華の御足こそが人生の至上の目標であると確信していた。だからこそ、主の御足を途切れることなく瞑想しつづけた。

要旨解説

主は『バガヴァッド・ギーター』（第7章・第28節）で、前世で敬虔な行ないをして、不敬な行ないの反動から解放された者たちだけが至高主シュリー・クリシュナの蓮華の御足に専念できる、と言っています。パーンダヴァ兄弟たちは、現世はもちろん、前世でも最善の敬虔な行ないをしていましたから、不敬な行ないの反動すべてから解放されています。ですから、かれらが至高主シュリー・クリシュナの蓮華の御足に心を集中させられるのは当然です。シュリー・ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティーによると、ダルマ、アルタ、カーマ、モークシャの原則は、不敬な行ないの結果からまだ自由になっていない人たちが受けいれるものです。この4つの原則の穢れに影響されている人々は、精神界にいる主の蓮華をすぐには受けいられません。ヴァイクンタの世界は物質界をはるかに超えた領域にあります。物質界はドウルガー・デーヴィーという主の物質エネルギーの管理下にあります。ヴァイクンタの世界は主個人のエネルギーによって管理されています。

第47－48節

तद्ध्यानोद्विक्तया भक्त्या विशुद्धधिषणाः परे ।
तस्मिन् नारायणपदे एकान्तमतयो गतिम् ॥ ४७ ॥
अवापुर्दुरवापां ते असद्विर्विषयात्मभिः ।
विधूतकल्मषा स्थानं विरजेनात्मनैव हि ॥ ४८ ॥

*tad-dhyānodriktayā bhaktyā
viśuddha-dhiṣaṇāḥ pare
tasmin nārāyaṇa-pade
ekānta-matayo gatim

avāpur duravāpām te
asadbhir viṣayātmabhiḥ
vidhūta-kalmaṣā sthānam
virajenātmanaiva hi*

tat—それ; *dhyāna*—完全な瞑想; *utrikṭayā*—～から自由になって; *bhaktyā*—献愛奉仕の態度によって; *viśuddha*—浄化された; *dhiṣaṇāḥ*—知性によって; *pare*—超越性に対して; *tasmin*—その中に; *nārāyaṇa*—人格主神、シュリー・クリシュナ; *pade*—蓮華の御足に; *ekānta-matayaḥ*—唯一の人物である至高者に心を定めた者達の; *gatim*—目的地; *avāpuḥ*—到達した; *duravāpām*—得ることが非常に困難な; *te*—彼らによって; *asadbhiḥ*—物質主義者達によって; *viṣaya-ātmabhiḥ*—物質的必要性に没頭して; *vidhūta*—洗い流した; *kalmaṣāḥ*—物質的穢れ; *sthānam*—住居; *virajena*—物質的激情のない; *ātmanā eva*—同じ体で; *hi*—確かに。

こうしてかれらは、絶えまない献愛奉仕の記憶という純粋な意識によって、至高のナーラーヤナ、すなわち主クリシュナによって統治されている精神界に到達した。これは、意識を逸らせることなく至高主を瞑想する者たちだけが達成できるものである。ゴーローカ・ヴリンダーヴァナとして知られる主シュリー・クリシュナの住居は、物質観念を持つ者たちには到達できない。しかしパーンダヴァ兄弟たちは、物質的な穢れをすべて洗いながしたために、かれらのその体のままこの住居に到達したのである。

要旨解説

シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーによると、徳・激情・無知の様式という物質の様式に影響されず、超越的境界のなかにいる人は、体を変えることなく最高完成に到達すること

ができます。シュリーラ・サナータナ・ゴースヴァーミーは『ハリ・バクティ・ヴィラーサ』で、だれであっても、本物の精神指導者に導かれて精神的訓練を忍耐強く実践することで、化学者が化学操作で砲金を金に変えられるように、再誕のブラーフマナという完成の境地に到達できる、と述べています。ですからこれが、体を変えることなくブラーフマナになる、あるいは体を変えずに神のもとに帰っていくことに関する真実の導きです。シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーは、この節で使われているhi (ヒ) がこの真理を明確に断定しており、この真実の境地について疑う余地はない、と言っています。『バガヴァッド・ギーター』（第14章・第26節）も、このシュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーの言葉を確証しています。逸脱することなく理路整然と献愛奉仕を実践する者はだれでも、物質自然界の三様式の穢れを克服してブラフマンの完成境地に到達し、そのブラフマンの境地が献愛奉仕の実践によってさらに高められれば、主が体を変えることなく自分の住居に戻っていくと学んだように、その魂は自分の体を変えることなく、ゴーローカ・ヴリンダーヴァナという至高の精神的惑星に到達できることに疑いの余地はありません。

第49節

विदुरोऽपि परित्यज्य प्रभासे देहमात्मनः ।
कृष्णावेशेन तच्चित्तः पितृभिः स्वक्षयं ययौ ॥ ४९ ॥

viduro 'pi parityajya
prabhāse deham ātmanaḥ
kṛṣṇāveśena tac-cittaḥ
pitṛbhiḥ sva-kṣayam yayau

viduraḥ—ヴィドウラ (マハーラージャ・ユディシュティラの叔父) ; *api*—もまた; *parityajya*—肉体を終えた後; *prabhāse*—プラバーサの巡礼地で; *deham ātmanaḥ*—彼の体; *kṛṣṇa*—人格主神; *āveśena*—その思いに没頭して; *tat*—彼の; *cittaḥ*—思考と活動; *pitṛbhiḥ*—ピトウリローカの住人達と; *sva-kṣayam*—彼の住居; *yayau*—去った。

ヴィドウラは巡礼の途中、プラバーサで肉体を去った。主クリシュナに思いを没頭させていたため、ピトウリローカ惑星の住人たちに迎えられ、自分本来の立場に戻った。

要旨解説

パーンダヴァ兄弟とヴィドゥラの違いは、前者は主・人格主神の永遠な交流者であり、ヴィドゥラはピトゥリローカ惑星を管理する半神の一人、すなわちヤマラージャだったということです。人間はヤマラージャを恐れています。物質界にいる邪悪な者たちを処罰する唯一の人物だからです。しかし主の献愛者は、ヤマラージャを恐れません。献愛者にとって、ヤマラージャは心からの献愛者ですが、非献愛者にとっては恐れの特権です。すでに説明しましたが、ヤマラージャはマンドゥーカ・ムニによってシュードラに墮落するよう呪われたため、ヴィドゥラがヤマラージャの化身であることがわかります。主の永遠な召使いとして献愛奉仕を熱心に行いながら敬虔な人間として生き、その結果、ドゥリタラーシュトラのような物質的な人間も、かれの教えによって救われました。主への献愛奉仕をとおして敬虔な行ないをすることで、主の蓮華の御足をいつも思いだし、シュードラの誕生としての穢れた生涯をすべて洗い清めることができました。最期に、ピトゥリローカの住人たちに迎えられ、本来の立場に戻りました。半神は主とじかに接することのない交流者ですが、主の直接の献愛者は主と個人的にいつも交流しています。主とその交流者たちは、化身となって無数の宇宙のなかに現われつづけます。主はそれをすべて覚えています。交流者は、主のひじょうに小さな部分体という立場にいるため忘れてしまいます。あまりにも極小の境地だからこそ、さまざまな出来事を忘れてしまうのです。これは『バガヴァッド・ギーター』（第4章・第5節）の言葉と一致しています。

第50節

द्रौपदी च तदाज्ञाय पत्नीनामनपेक्षताम् ।
वासुदेवे भगवति ह्येकान्तमतिराप तम् ॥ ५० ॥

*draupadī ca tadājñāya
patinām anapekṣatām
vāsudeve bhagavati
hy ekānta-matir āpa tam*

draupadī—ドゥラウパディー(パーンダヴァ兄弟達の妻); *ca*—そして; *tadā*—その時; *ājñāya*—主クリシュナをよく充分に知っている; *patinām*—夫達の; *anapekṣatām*—彼女を顧みなかった者達; *vāsudeve*—主ヴァースデーヴァ(クリシュナ)に; *bhagavati*—人格主神; *hi*—まさに; *eka-anta*—絶対に; *matih*—集中; *āpa*—手に入れた; *tam*—彼(主)を。

ドゥラウパディーも、夫たちが自分にかまうことなく家を去っていく様を見た。かのじよは

主ヴァースデーヴァ、すなわちクリシュナ・人格主神のことをよく知っていた。かのじよとスバドラーはクリシュナへの思いに浸り、夫たちと同じ結果に辿りついた。

要旨解説

飛行機に乗っているあいだ、ほかの飛行機のことにはなにもできません。自分が乗っている飛行機を操縦しなくてはなりませんし、もし危険な状態にでもなってしまうと、ほかの飛行機からの助けは望めません。同じように、この世を去ってふるさとへ、神のもとへ帰ろうとするとき、ほかの人に助けられることなく、自分でなんとかしなくてはなりません。しかしその助けは、空に飛びたつまえ、つまり地面にいるときに準備されているものです。同じように、精神指導者、父親、母親、親族、夫や他の人々が、生きているあいだいろいろと助けてはくれるのですが、ひとりで海を渡っているときは自分の力で乗り切らなくてはなりませんし、以前教わった知識を活用しなくてはなりません。ドウラウパディーには5人の夫がいましたが、だれひとりとして一緒に来るよう言いませんでした。偉大な夫たちの助けを待たずに、自分でなんとかしなくてはならなかったのです。そして、すでに訓練を受けた女性でしたから、すぐに主ヴァースデーヴァ、クリシュナ、人格主神の蓮華の御足に心を集中させました。二人は夫たちと同じ形で、同じ結果を授かったのです。すなわち、体を変えることなく、主神という目的地に達したということです。このことについてシュリーラ・ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティー・タークラは、ドウラウパディーとスバドラーのどちらも（この節にスバドラーの名前はありますが）同じ結果を得た、と言っています。二人とも体を放棄する必要がなかった、ということです。

第51節

यः श्रद्धयैतद् भगवत्प्रियाणां
पाण्डोः सुतानामिति सम्प्रयाणम् ।
शृणोत्यलं स्वस्त्ययनं पवित्रं
लब्ध्वा हरौ भक्तिमुपैति सिद्धिम् ॥ ५१ ॥

*yaḥ śraddhayaitad bhagavat-priyāṇām
pāṇḍoḥ sutānām iti samprayāṇam
śṛṇoty alaṁ svastyayanam pavitraṁ
labdhvā harau bhaktim upaiti siddhim*

yaḥ—～である者は誰でも; śraddhayā—献愛の気持ちで; etat—この; bhagavat-priyāṇām—人格主神にとって非常に愛しい者達の; pāṇḍoḥ—パンドウの; sutānām—息子達の; iti—そのように; samprayāṇam—窮極目標への出立; śṛṇoti—聞く; alam—～だけ; svastyayanam—幸運; pavitram—完璧に純粋な; labdhvā—得ることで; harau—至高主に; bhaktim—献愛奉仕; upaiti—手に入れる; siddhim—完成。

パンドウの子息たちが人生の窮極目標である神のもとに帰っていったこの話は、すべてにおいて吉兆で、完璧に純粋である。ゆえに、強い献愛の思いでこの話しを聞く者はだれでも、人生の最高完成である主への献愛奉仕をまちがいなく達成できる。

要旨解説

『シュリーマド・バーガヴァタム』は、人格主神と、そしてパンドヴァ兄弟のような主の献愛者たちの物語です。人格主神と献愛者の話は、それ自体が絶対純粋であり、強い献愛の思いで聞く行為は、主とじかにふれあい、主といつも寄り添っているということにほかなりません。

『シュリーマド・バーガヴァタム』を聞くこの方法に従えば、ふるさとへ、神のもとに帰るといふ人生の最高完成の境地に、確実に到達します。

これで、バクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』、第1編・第15章、「パンドヴァ兄弟、時を得て出家する」の要旨解説を終了します。